

太陽の
ラ・ニャ

19



Miracles! Episode 19

- 太陽のラ・ニーニャ -

時にカジアル時に武人、
麗い目に騙されては
いたる。不慮の守護神。

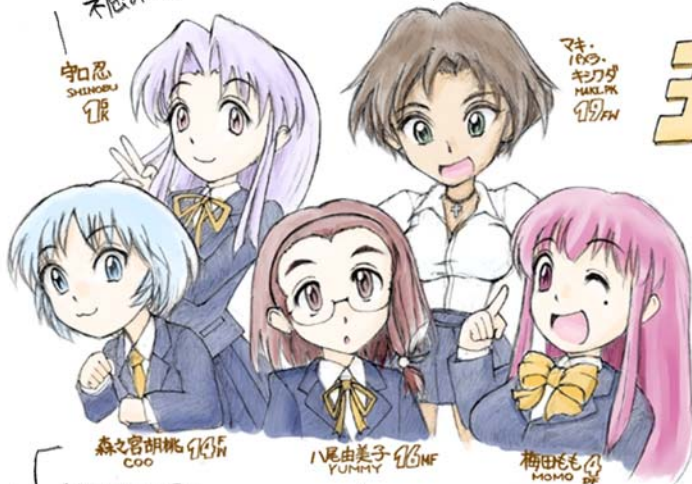
知忍
SHINOBU
DF

ヒロイン
本日の主演

日系4世マジリアン。
誰にも止められないガンジリサバ嬢。
トロッキーウイング。

マキ・
169cm
キリカダ
MAKIKI
157/FW

3RD



森之宮胡桃 GO
COO

クールで軽えどこのない、
どきどきに何となく
ネコ娘。
高度戦闘爆撃
センターFW。

八尾由美子 YUMMY
YUMMY MF

！
努力家の頼れる姉貴。
ガツと肝五は
天下一品！
MF/DF自備職人。

柳田もも子 MOMO
DF

！
B3桁のダイヤトボデー
バイクを荒い回る食神。
フェアレディDF1-ダー。

- ラエまち だいり
・上町大地 (2年) ... カッパ-戦術と乙女心掌握の天才。2-4 (監督)。
からぼり さとる
- ・空環三六 (2年) ... 軽い足腰と無駄に豊富なアイデア。
4-6、プロローグ。

登場人物
ご紹介

- こまがわ たくみ
・駒川匠 (2年) ... 腕は確かだが従軍カメラマン。
- せしやし てつや
・千林 哲哉 (2年) ... 援田副団にしてサポ-リーダー。
- たかやま かずひろ
・高安 和輝 (2年) ... 放送部。テンション高めの実況者有名。

日露ハーフの元ファイター
スパーター。物腰柔らか。
微笑みと絶やさぬ。
中盤の働き蜂。
ハニービー

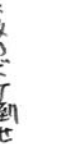
ボーイッシュ&元気一番。
ムードメーカー。
FW兼任の超反応GK。

1ST
平野
ELENA
BF

牧田千里
CHEETAH
GK



住吉古都
COTTON
Manager



見た目派手でも
縁の下の力持ち。
与配り大得意
マネージャー。

一見ニコバーバズ。
実は底の知れない
天才少女。
ファンタジスタ。

ト単純だけどどこか
カワイイ裏ん子。
コース代表の逸材。
エース・ストライカー。

天上無敵のボク倒せおせうさま。
敵も味方も大混乱。
鉄壁の右サードバック。

神経質そうだけど
オアシスカンコイを最長。
クレーンなスピードDF。

天真爛漫食いしん坊な
ナチュラール・ガール。
超攻撃的パワフルバロ。

無口ながら
存在感あつきの
超絶走り女。
実はお茶目。
フィジカル系
バロ-FW。

2ND
美原
はなこ
HANAKO

天満蘭
LAN
DF



センス抜群
切れ味抜群
おんだかんだんいかにこもてく
ズい奴。光速サイドアタッカー。

強く優しく頼もしい。
我らが黒柱。
パーフェクトボランチ、キャプテン。

突進ヤカール小娘
おぼん
美浪花主将。
盛り上げ上手な
テクニカル司令塔。

和泉流
RYUNAKI
DF

長居美緒
MIO
FW

新波海
NANA
FW

堺愛
LOVE
FW

●あらすじ？

「ミラクルズ」はとある街の女子サッカークラブチーム。
ただいまは冬の日本一を決めるオープン大会
「クイーンズカップ」めざし、にぎやかに奮闘中。
今回はいつも陽気なチームの太陽、
マキちゃんのお話らしいですぞ？
はてさて、どんな騒動が巻き起こりますことやら……

●もくじ！

- 少年
- 里心
- 二兎を追う者
- 少年たち
- 旅人
- 弟
- 写真
- フェジョアーダ
- カテナチオ
- 19番
- ラ・ニーニャ

少年

「……ヤツバア……」

とか言つてももーしーがないかあ……」

トボトボとセカセカの混じった妙な足取りで学校への道を急ぐマキ・パメラ・キシワダ。

皆さんもご経験あるでしょう、遅刻しちゃった時の「急がなきゃ」と「もう急いでもしょうがない」の狭

間にあるこの速度を。

昨日、故郷ブラジルの家族と電話でお話してたら
盛り上がっちゃって、夜更かししてこのザマ。

「……だいたいニホンジンはなんでも急ぎすぎなんだ
ヨー。朝なんか一二時でいーじゃん、サンパウロじゃ
そーだよ？ ブツブツ……」

そんなことはないだろう。

「……ん？」

肩を落とし背を丸め歩いていたマキの目に、違和感がある。いつも通る大きめの公園に、こんな時間にポツリ、男の子が居た。年の頃なら十かそこら、小学生高学年で事実ランドセルも背負ったままだ。

『チコクかあ』

今まさにそうだが、時間にはわりとおおらかなマキ、遅刻した時の学校への足の向かわなさはよく知ってい

る。

『……ヨシ!』

どうせ時間はある。

「……Boy」

「!」

斜め後ろからベンチ越しに声を掛けると、男の子は振り向いた。その目には不審よりも、悪いことを見咎

められた怯えが見える。

「サボり？」

「……」

ぷい、と地面を見る。

「遅くなつても学校は行つた方がいいゾー。先生とか友達とか心配してるからなー」

「……お姉ちゃんには関係ないだろ」

「いや、ある！」

……サッカー、好きだろ」

「え」

「ミラン、いいよな！」

興味を引いたもう一つの理由。その子の着てるシャツはイタリア・セリエAの強豪、ACミランの赤黒縦縞模様だった。

ニタツ、と笑うと男の子は驚いた目を伏せた。

「アタシもサッカーやるんだ。ミランは憧れだよね。ホレ、ガツコ行つてサッカーしてこい！ ミラン

に入れるようにネ！　アハハハハハ！」

「……」

徐々に彼の顔は、見知らぬ年長者に対して警戒する顔から、なにかに惑うような、そんな顔になる。ほんのわずかだが、サッカーの話題で心の扉に隙間が開いたのだろうか。

トン、とその石造りのベンチの、隣りに座った。

「……なに、イジメられてんの？」

「……そんなじゃない……」

「じゃー行けばいいじゃん。楽しいでしょ、ガツコ」

「……別に楽しくない……」

「なんでえ!? トモダチとバカ言ってるだけですつごい楽しいじゃんかー!」

「……」

「……そんなの、居ない」

「はへー? あれ、サッカー一緒にやる奴は!?」

「居ない」

「なんだキミ、ひよつとして……」

「……わあっ!」

マキは少年の胸元に鼻先を突っ込んだ。クンクン。
男の子は仰け反って、固まる。

「別に臭くないな」

「……あ、あたりまえだよ!! な、なんだよ、失礼な
人だな!!」

「アハハハハ、ゴメンゴメン、クサイから嫌われてん
のかなー、と思つてさー」

「んなわけ、ないつてば!!」

なんだこの人、と思つて見る。

太陽のように笑うそのお姉さんは、褐色の肌に黒い髪緑の瞳。はだけた胸元から深い谷間が覗きブラウスは見たこと無いほど立体的で、短いスカートからはまた健康的な小麦色が二本、輝きながら飛び出していた。

むかし、友だちとやったゲームにいた「ダークエルフ」みたいだ。

「……ン？ ネーチャン、珍しい？」

「あつ、いや、すいませんっ！」

慌てて目を逸らした。

「イーヨイーヨ、ガイジンだもんなー」

「……」

ゴシゴシゴシ……と髪を撫でられた。

でも、そんな軽いスキンシップで肩の力がちよつとだけ抜ける。お詫びの印に、言い難いと言った。

「……ひつ、引越したてで……まだ居ないだけだよ……」

「ああ、なんだそーかし、なら早くそういいなよー。

アハハハハ」

「笑うことじゃないよ……」

「アハハ、ゴメンゴメン、ネーチャンもさ、経験あるからさ。引っ越してトモダチ居ないの」

「……そなんだ」

「ん。お姉ちゃんブラジルからニホン来たんだー。二年ちよつとぐらい前にねー。だからそんな時だーれもトモダチ居なくてさー」

「……」

「参ったさー。ガツコ始まるまで、おウチでヒトリで

サー。それまでは晩ご飯つっても三〇人ぐらいで食べたのがヒトリだよヒトリ」

「……」

「ガツコでもそうなのかな、とかもーウツつてゆーの？ になつてもー早くブラジル帰りたいつてばつか思つてた」

「……」

「……ところがガツコ行つてみたらイイヤツが居てねー。こいつが会つた瞬間からトモダチになつてくれてー。で、寂しくなくなつた！」

「……」

『……君、どこから来たの!? カッコよすぎるよその

スタイルその肌そのおめめ! ねねね、友達になろう

よ! 私、梅田もも! 『ハニー・プラム・ピーチ・ボ

ム』とでも何とでも好きなように呼んで!』

『エ、ア、ハイ、ヨ、ヨロシクオネガシマス』

『うーん、たどたどしい発音がまたデリーシオウ

ス! グッデイ!!』

『……ハ、ハア……』

『あれ、私の英語、おかしい?』

……あれは幸運だったのか、それともその後変な友人ばかりが増えて、変なことばかりに巻き込まれていくところを考えると不運だったのか。

問うまでもない、ただの奇跡だ。

人間の一生には何回かそういうことが起こると言うのなら、こんな早く一回目を使ってもいいものか。

「……だからきつとそんなヤツが、君にも現れるさ」

「……いいんだ」

「ん？」

男の子は立ち上がった。決意を秘めた凜とした表情。男の子はこういう顔をする。誰しも男前になれる。いや、実際よく見れば、サラサラの髪が似合うなかなかの美少年だ。ちいさいコーチ、みたいな。

「……僕、いつか帰るんだ。元のウチへ。元の学校へ。だから友達、要らないよ」

「そんなことないだろー、どこへ行ってもトモダチはいーもんだ」

「……また、別れるのが辛いだろ」

まあ、それは確かに。

よほど、別れが辛かったのだろう。

マキがなんとも言い難い顔をしていると、彼はさすがに悪いとも思ってくれたのか、

「……お姉ちゃん、学校は、行くよ」

「……ン。そーしな。」

コドモはガツコ行くのが、ギムだ」

「偉そうに。自分だつてサボりのクセに」

「ガツ……サ、サボってないよ！　これから行くん

だ！」

「……じゃ。さよなら」

「おう！ ガンバレヨー！」

男の子はランドセルを揺らして駆け出した。ああ、あれは結構やつてるっぽい。ジョグだけど軸のブレてないいい走り方。ミランのユニがよく似合ってる。

……振り返った。

「……あつ、ありがとう!!」

照れたつぷりのその叫びに、マキは言葉には出さず、思い切りニツコリして小さく手を振った。

孤独の薬に、暖かい人の声以上のものはない。故郷を離れて二年半、一度もあの暖かい我が家に帰ってないマキは、それを誰より知っていた。自分もみんなに貰ってるクスリを、分けてあげただけ。

新天地ですつと過ごすとかわかっていればまだいいのかもしれない。帰るところがある方がむしろ……いや。

人間には二種類あつて、ヤクスギのように永遠かと思ふ時間そこに根を張りそこで生きるものと、タンポポのようにふわふわと世界を漂い、落ちた所で花を咲かせるものと。

きつとアタシはタンポポで、たぶんあの子もそうなんだろう。

それは、自分では選べない。運命つてヤツだ。ならば、それを楽しむしかない。

「……さて、ガッコガッコ」

立ち上がってスカートの埃を払う。足取りは、スキップになっていた。

■ 里心

「どどどーん！ マツキー、おっひるくくく！」

「……」

いつものごとく満面の笑みと腕いっぱいのお弁当箱を抱えて声を掛ける、梅田もも。

だがいつもなら「アイヨー！」とでも叫んでロケツトのように垂直に席を立つマキが、今日に限って微動

だにしない。あまつさえ、

「……はあ……」

ちいさなため息。

「……レレ。まつきー？」

ももが長い髪をだらりと垂らしてやや伏せ気味の顔を覗き込むが、マキは焦点の合わない目を遠くしたまま。

「…………こつ、これはもしやまさかしてあるいはまた万が一…………伝説の…………こつ、恋わずらい!!」

ももは断定の好きな女で、世界を自分の好みの模様で切り取ってはスクラップブックのように勝手に勝手に並べ替える。

だつてそのほうが楽しいじゃん。

その巨体を軽くのけぞらせるわざとらしい素人小芝居の後、いきなりマキの開けた胸元に掴みかかる。

「おつ、お相手は誰っ!? アレ!? それともアレ!?
もしかして、アレっ!?」

だいたい一人を念頭に置いて問い・質す。まあ、出
会いのない私たちですから、男の子と言い出すとアレ
かコレかソレかホレかドレかゴレで、コレとソレには
既にコブが付いており、ホレは女嫌いでドレとゴレは
試合以外であまり接触が無くて……

「……ぐ、ぐる……バツ。

モ、モモオ、な、なにやつでる、ノオウ?」

「はっ。気づいた!?

マキ、大丈夫だよ、恋のキューピッド役は私にぜんぶ任せて!」

「あい?」

またでっかい弓引いてるなあ……ブールデルのヘラクレスか那須与一か。そんな弓じゃ相手死んじゃう。

「私思うんだけどね、恋の最大の障害って、つまりじぶんの心なの! イン・マイ・ハー。いい? ライバルが強力だとか、そんなことちつとも考えなくていい

から！」

「ハア」

「ま強力なんだけどね。人数も多いしね。ま、でも、マキならきつと……えー……マキならほら、どんな強力な相手でもー……えー……」

中でも「主将」と呼ばれる女は難物である。「味方にするとかれほど心強い武将も居ないが、敵に回すとこれほど恐ろしい武将は居ない」と石田三成がその書、『近江八幡丁稚羊羹記』に遺している。

「……是々非々で応援するから。」

「いつ、いつたいなんの話なの？」

「あれっ、恋患いでしょ？」

「コイワズライ？」

エツト、それナニ、ヨーグルト？」

「小岩井のはだいたいどれも美味しいんだよね……いやそうじゃなくて」

マキの顔は、さっきまでの呆としたものから普段通り、ブラジル娘の彫りが深くて表情豊かな顔。

「……やー、なんかブーツとしてたから。そだそだ、もうお昼だよ？」

「エッ!? あ、ああつ、お昼かー！ わかった、みんなのとこ行こ……アッ!!」

「な、なにどうしたの」

「パン買うの忘れちゃった。今日遅刻しちゃつてさー」

「ええっ!? でも今日は私お弁当の量ちよつと少なめだから分けてあげられないッ！」

その両手に抱えられている弁当箱は大型四つ。メ

シ・メシ・おかず・甘いもの。

「買いに行つてくるヨ！ 先行つてて！」

「あ、あー……私も手伝いに行くよ！」

「手伝ってもらふようなことじゃないよー」

「ううん、ついでに私も軽くおやつを……」

「……止めないけどさ、モモ、人が何か食べたり食べようとしたりする時に無条件でそれを欲しがる癖、止めた方がイイヨ？」

「私女でよかったよ。きつと男に生まれてたら浮気者
つて叱られちゃう……」

「全然違う問題だと思う」

「ああつ！ でも、メロンパンを食べていても焼きそばパンが目の前にあったら、それは、欲しく、なるの！

イケナイ女……」

「イケナイのは確かだね。

てなこと言ってる場合じゃないや」

「急ごう！ 揚げたて三色メロンパンが売り切れちゃうよ！」

「モモ、毎食お弁当なのになんでパンに詳しいの」

「一〇時のおやつと三時のおやつに決まってるじゃない

い。パンとパンの食間に食べる白米のこれがまた美味しいこと！」

「……もうお昼要らない気がしてきた……」

——で、守口忍、八尾由美子、森之宮胡桃つまりミラクルズ3年生が仲良くお弁当をつっている教室にたどり着いたのが五分後。

「……あれ、遅かったね二人」

「もー、マツキーがさー、パン買い忘れちゃってー！」

「へへへ、ゴメンゴメン」

すらりと長い足を組んで椅子に座ると、胸元のロザリオの前でちいさく十字を切る。袋の中で包装を破つてパンを取り出し、さつそくカプリ、喰い千切る。

そんなごく普通の仕草でも、スタイル抜群の日系ブラジル四世、とてもとても様になる。

バゲット系の固めのパンを噛み砕く大きなマウスアクション、ほおを膨らませてモゴモゴする様さえ、

「少しずつ食べなさい」と教えられる純日本人女子には珍しく、ワイルドというか動物的というか、まあと

にかく「生きてる」感じは強い。

「あつ、そのヨーグルトフランス美味しいよね。私大好き！　ひとくちちよーだい？」

「だーかーらー、モモは先に自分のその揚げ三色メロパンを食べなヨー！」

「ふふつ、またももの人の欲しがり病ね」

「そーだよユミ、チューイしてやってー」

「でうえーい。ばがりまじだ。自分の食べマーズ」

「ん？　もも、今日はパン？」

「あ、忍ちゃん、これは単なる食前食だよ！」

「そんな日本語初めて聞いたわ」

「でもこれちよつと油っぽいから、バゲット系で中和するのもいいかな、って思ったのさ、ふふん」

「うわ、これ一個でカロリー一六〇〇kcalだつて」

「もぐもぐでもカロリー比で甘味が足りないのよもぐもぐ。油っぽくすると甘味感じにくくなるから、これに上から蜂蜜か、もぐもぐ練乳を垂らすと、いいと思うんだよーもぐもぐ」

健啖で鳴らすミラクルズの面々だが、中でもももは「彼女は別格」と誉も高い。だが、そのおそるべき力

ロリー摂取量を巨体をDFライン上で右往左往させることで使い切るのか、質量は物凄いのだが「太ってる」感じはしない。

アメリカンフットボールのラインメンで、二m一二〇kgなんて巨漢が、ありえない俊敏さで敵の眼前に立ち塞がるでしょう。あれ。

マキとももが頬張りはじめたのを見て、三人は話をさつきまでの続きに戻す。

「……あそこ、文学部も結構有名だったはずよ。忍の

場合は家から行けた方がいいわけでしょう？」

「そうとも限らないけどまあ、近い方がいいことはいね。私自身もまだお稽古はしたいし」

「じゃあ、あそこ、いいんじゃないかな。でもちよつと、ハードだよ？」

「わかってますよさすがに私だつてー。仮にも旧帝大だもんねー」

「もぐユーミ、忍ちゃん、なんの話？もぐ」

「進路。」

忍があそこの大学の文学部どうか、って聞くから「えーっ、忍ちゃんブンガクやるのー？」

「いや、文学ではなくて……いや、文学か」

忍、いつものカジュアルフェイスから、ちよつと武人モード気味に、

「私には父のような体術の才能は無いので、どちらかといえば術理の研究でサポートしたい、と思つてな。

特に……古武術の古文書を研究してみたい」

「ああー、なるほど、それで文学部ー」

「草書読み下すのはひとつの技術だからね。文学部の史学科なんかで鍛えた方がいいわ」

東大だつて狙えちやう優等生のユミが解説。

「急がねばどんどん資料は散逸してしまう。今でも『古武術』というだけで世間の人々は胡散臭そうな目を向けるからな。ま、実際、胡散臭い書物も多いのだが」

「私てつきり忍ちゃんは国際武術大学かなにかに行くものだ」と

「はははっ、もしそんな大学があつたとしても、私では駄目だ」

「そうかなー。忍ちゃん昔からやってるし根性もあるしセンスもいいしー」

「いや、そういう問題ではない。

一つの道を極めるにはおそらく、そうだな、可憐のような、『真っ直ぐさ』が必要だろう、と思う。私は、あそこまで、人生のすべてを賭ける、そんな気迫や思い入れは、ない」

此花可憐は、チームのエース・ストライカーだ。小さい頃から「ゆくゆくは日の丸の9番」と言われ続けてきた天才少女、もちろん現役ユース代表、は確かに、

溢れる才能にもまして日々、サッカーのことしか考えていない。

「でももつたいないな。忍ちゃんなら、宮本武蔵にだつてなれそうなのに」

「ああ、剣を振るうのは止めぬ。ただ重心をすこし、そちらに置いてみようかと思う」

「意外だなあ……でも忍ちゃんは、和服で古い本読んでるのも似合うのかも！」

ねね、ユーミは？ ユーミは普通にトーダイ行つてカンリョーになつてアマクダリそしてオンキュー？」

「ひとの人生をそんなに縮めないで」

と言いつつ優しいユミ姉は笑って、

「ちよつといろいろ考えるところあるので、普通に法学部行つて政治経済国際関係を学びつつ語学を鍛えるわ」

「それ普通じゃないよ」

「あゝ、おとーさんと同じ研究するんだっけ」

「ん、んー……さあどうかな？　ちよつと分からないけど。ふふふ」

隠し事をする子供のようには含み笑い。

「なになに、なに意味深にしてるのー」

「だって恥ずかしいじゃない、なつてもいない職業を、
『なります』とか宣言するの」

「私、全然恥ずかしくないよ？」

「じゃももは何になるの？」

「シシヨクイン！」

「ああ、地方公務員ね。いいんじゃない。安定して
て」

「市職員じゃないよ、試食員。日がな一日試食する人」

「そんな職あるの？」

「あるよお！ こないだテレビでやってた。ラーメンの開発してる人でね、一日中ラーメン食べてた」

「ああ、そういうのね。それなら食品関係の商品企画か開発エンジニアって言つてよ」

「商品企画とか技術とか興味ないもん。」

「ただ試食ができれば、それでいい」

「……ヤナギちゃんが」

胡桃が、シュークリームをくわえつつ首を突っ込む。

「ああ、あのぽちちやりタレントの」

「ん。売れない頃、試食販売のバイトしてて」

「ほう」

「すつごく美味しそうに食べるからすごく売り上げよくて、ほうぼうから引つ張りだこだった、って」

「それだ！　それ！　美味しそうに食べるのには自信あるよ！」

「ヤー、ももの食べ方って、美味しそうを越えてびつくり人間ショー」

「またそうやって人を誉めそやして調子に乗せるですよ？ 私早食いは苦手だよ、大食いはともかく」

「超早いよ。さっきの今でもうパン一つとごはん箱ひとつ空いてんじゃない」

「ごはんはほら、飲み物だから」

「ほんつと今いいけどその食べ方歳取ると絶対消化系の病気になる」

「鳥はね？ 歯がないから食べ物を砂肝で磨り潰すの」

「あなたさすがに砂肝は持っていないでしょ」

「わかんないよーバラしてみないと!!」

「もーは、どつちかというと、うし」

「うっしっし、胃、四つ欲しいよね私たちも！」

「文句は造物主に言つて」

「イエス！」

で、くーちゃんはなにになるの？ 猫？」

「ニャー」

右手を高く上げて、手首をキュツ、と折つた。

「ホントなんだ……」

「ふふっ、いや、胡桃、体育大行つて体育の先生にな

る、って」

「へーっ、先生!? 意外ー」

「意外? 私、運動、好きだよ?」

「あれ? んー……あそだね」

胡桃は汎用的な運動センスが抜群で、たぶんチームでは吹田千里と一、二を争う。サッカー、バスケ、野球、水泳、バレー、バトミントン、ドッジ、チャンバラ、カルタダーツ、そしてマイム、マイム、なんでも上手い。

そう言われれば、体育教師に非常に向いてる気がする。

「……バスケの時もいまのサッカーも、チームでみんなでやるの、楽しいから」

「なるほど、ねえー」

彼女は会話の間や言い回しが独特なのだが、体育系ならヘタに饒舌よりこちらの方がいいかもしれない。なにより、中学バスケット日本一の実績と、これから掴みとる予定・はず・つमりの女子サッカー日本一の実績は、生徒達から憧れの眼差しを浴びることだろう。

「忍は古文書を解読するトレジャーハンター、ユーミは日本を滅ぼす悪の官僚、くーちゃんはエッチな保健の先生……みんな真面目に考えてんだね！」

「人の話、ちゃんと聞いて」

「私は大学行ってから真面目に考えようかと思つたよ……あつ、マキちゃん、そういうばマキちゃんは!?」

「ああ、そうね。ブラジル帰るの？ それとも日本で進学オア就職？」

「……」

ユミに訊かれたマキはちよつと天を仰いで、苦笑い。

「……まだ、決めてないンダ」

「そかー。」

よかつたらマキちゃん、日本に残っちゃいなよー。
ブラジル語できるんだからなんでも仕事あるつてー」

「ポルトガル語。そうね、あと社会的常識さえあれば
引く手あまたじゃない？　これから新興国相手のビジ
ネスはますます盛んだろうから」

「……ンー……」

おや、と四人の手が止まった。いつも元気で陽気、
明るい彼女が、今日はおとなしい、ばかりか、ちよつ
と沈みがちにさえ見える。

「……アタシ、さ」

「うん」

「なんかこのままずっとこういう日が続くもんだと、
思ってた」

「ああ」

卒業はまだ先だが、そうなれば、そうなる。

五人は、いやチームはバラバラに、それぞれの道を、歩む。

「……へへッ、今朝までそんな風に思ってたんだけど、ちよつと今朝フルサトを思い出すようなことがあつて」

「えっ、どんなこと？　って聞いていいの？」
「ン。」

ちっちゃい男の子が、フルサト離れて引つ越してきてさ、トモダチ居なくて寂しい、って、公園でひとりしよげててさ」

「ふむふむ」

「それで慰めたら、『いいんだ、僕帰るから！』って
言つてさ……」

そうだなあ、おうち、帰るおうちって、いいよなあ、
って思ったら……なんかわかんなく、なってきたの」

「里心がついたか」

「望郷の念ね……」

「サトゴコロ？　ボーキョー？」

サツ、といつも持ち歩いてる小さなメモを取り出す。
海外製らしい黄色く薄い紙に、ユミが几帳面な楷書で

「里心」と「望郷」と書いてあげる。

「ふる『里』を想う『心』。故『郷』を『望』む心」
「リカイ。アリガト。」

いい言葉だね」

「ん」

「……でもウチ帰ると農園の仕事だしなあ……いやー
イヤじゃないんだけど……向いてないナー……」

「農園いーじゃない！ 食べ放題なんでしょ!？」

「もー、もも、そんなにストイックに自分を食いしん
坊キャラに追い詰めないで」

「アハハ、残念、ウチはメインが紅茶だから、食べられないヨ」

「紅茶のシフォンケーキとか、なんとでもやりようはあるわいなー!!」

「アハハハッ……」

マキの実家は、農園をやっている。オオジーちゃんこと曾祖父、岸和田亮太郎が移民以来裸一貫、苦労に苦心を重ねて築き上げた。

一家は四代一族ほぼ全員で農園経営に当たっており、つまり普通に行くと日本流に言えば「婿を取って女当

主」というのが長女・マキの目の前に横たわる未来予想図、だ。

「あ、でも紅茶って意外だね。ブラジルといえば何と言っても珈琲」

「ウン。みんな紅茶は飲まないヨ。ほとんど全部輸出。ウチはイギリスとか、ニホンにもちよつと」

「へーっ、驚き。遠い国の人の食べ物、作ってるんだね」

「こないだ松茸、食べたけど」

胡桃がシュークリームの底に指を立てた。松茸のつもり。

「トルコから来てた」

「うわお」

「グローバルゲーションとか言うの、それ」

「グローバルゼーションね。」

そつか。紅茶摘み娘。可愛いじゃない？」

「違うよもー、オカーサンがね、経理担当なの。だから代わりにやらせようとして、アタシが今回日本に来たのだって、最後までアメリカにしろー、アメリカ

にしろー、って！」

「あら。別に経理なら経理の勉強、日本でもできるじゃない」

「オカーサンアメリカに留学しててー、そこでオトーサンと知り合ったからー、アメリカが光り輝く青春の国なんだヨー」

「あははっ」

「じゃマキが日本へ来たのは、例のゴッド・ファーザーのオススメ？」

「うん、まあね。キシワダ家の人間は一回海外へ出ないといけないの」

「なかなか積極的な教育方針だな」

「ご自身がご苦労されたでしょうから、可愛い子には旅をさせよ、なんでしょうね」

「じゃあ、それまであまり日本には興味無かったの？」

「ウウン、ウチ家の中では日本語も使うからー。これもオオジーチャンのゲンメーで。オカーサン今でも苦労してるよ、アハハ」

「あらら」

「お父さんも大変なんじゃない？ 三代目ぐらいになるともう」

「あ、えつとね、ウチはオオジーチャンと死んだオオバーチャンがニホンジンなので、オジーチャンつてニホンジンなんだー。で、結婚したオバーチャンもニホンジンとブラジルジンのハーフなんで、オトーサンは3/4ニホンジンなのー」

「はー。」

あれ、てことはマキは」

「ん。アタシ3/8ニホンジンだよ」

見かけからはまるでそんな風には見えないが、これもグローバリゼーションか。

「やだ、わたしもうマキは四世って聞いてたからてつきりⅡⅠのぐらいしか入ってないとばかり。さっすがブラジル人！とか思ってたのに思ったより日本人じゃない。なにそれ。エレちゃんとおんなじぐらいじゃない」

「アア、エレは見事にハーフっぽいよねー」

平野エレーナは父日本母ロシアのミックスで、雪のような肌に水色の瞳にパーフェクトブロンド、だがなんとなく顔の輪郭が丸くぷよぷよの餅肌であり、下半

身がごつくとでもスラブではない。「ああ半分ずつです」ね」と言われれば膝を打つ。

それに比べれば全然「ガイジン」だ。

「オカーサンの方がもうわけわからないぐらい混ざってるからね。緑の目、ウチでアタシひとりだもん」

あつかんべー、をした。

「へえっ……」

「弟はね、目は青。アタシと逆で肌真っ白。エレちゃ

んみたいなブロンドで」

「へーっ！ 姉弟でそんなに違うの！」

「あ、そういえば弟が居るって言ってたよね。写真とか無いの？」

「無いよそんなのー。なんでアタシがあんなヤツの写真持ち歩かなきゃなんないのー」

「一般的に姉は弟のことが気になるんじゃないの？ ユミちゃん謙司君にお土産とか持って帰ってあげるよねー」

「まあ、ウチはちよつと離れてるから……」

「モー、あいつテキトーなんだよ、アイルトン・セナ

に懂れててサー。レーサーになるって聞かないから危ないつつって家中で反対してんだけどカート始めちゃってー。もーオトーサン疲れてるのにレースのたんびに応援に行ってー。んで一等取ればいいよ？　すごい才能あつたら。デモいっつもビリなんだよー！」

「ふふふっ」

「ビリなんだよアクセル開けないから観ててもスツゲー遅い。」

でもオトーサンもオカーサンも、ウウン、オジーちゃんもオバーちゃんもみーんなあいつには甘いんだ！ちよつとカオがよくておとなしいからって！」

「おつ、イケメンなの？」

「よくベツカムとトム・クルーズを足して二で割った、
って言われる」

「「写真持つて来なさい」」

「あ、そつか、ニホンのオンナノコが好きそうな顔で
はあるかもねー。ミカ・ハツキネンとか好きでしよミ
ンナ」

「その人は知らないなあ」

「……上町大地とだと、どつちが上」

「ダイチと？」

んー……ダイチの九〇%ぐらいじゃない？」

「「ウルトラハンサム君じゃない」」

「エー……ソーカナー……」

兄弟姉妹は兄弟姉妹の容姿にだいたい厳しい。

「でも楽しそうなお家だよね。私たちは寂しいけど、マキちゃんにとっては、帰るのもいいのかなー」

「んー……」

……あーやつぱりなんかヤダ、もうちよつとワイワイやってたーい！ ウン、アタシもクーの真似して、タイイクのセンスイ、やろっかな！」

「ウエルカム」

「ふふつ。まあ、それもいいかもね。まだ時間はもうちよつとだけあるから、じつくり考えれば」

「そうだ！　そうだよ！

何と言つても実家から逃げ出すだけなら、『お嫁さん』って手があるよ！」

「アッ、ソレソレ！　昨日、電話してたら幼馴染の子がひとり結婚しててー」

「「えーっ!?!」」

「あつ、早いよブラジル。フツー。もうハタチすぎると半分ぐらいは結婚してる」

「あららら」

「ヨ～～～シ！」

「イツチヨウ、ダイチあたりを口説いてネ」

「「いやあ～～～～～～……」」

いやその人はですね、その人そのものの「あなたホモ？」ってぐらいそゆことへの興味なさもさることながら、その前に万里の長城みたいな絶対防壁が……

「アレッ、ナニ、みんな狙ってるの？」

「いやそりやアレがソレすりやそりや最高だけど」

「宝くじ」

「私は負けるとわかってる戦いに乗り出すほど無謀じゃないつもり」

「マキちゃん。それはね、きつと……チョコ部分を食べ終わったチョココロネをストローにしてネクターを一ガロン飲むぐらい、難しいことだよ」

「前半要るのか」

「アハハッ、ジョーダンジョーダン。」

恋つていうのは、きつともつと情熱的なもんだネ。

そんなこと言う暇もないほど、好きな人めがけて駆けつけちゃうぐらいに！」

「おつ、ラテンなお言葉」

「ふふつ、そうね。つて、私経験無いけど」

「ホントかユミ姉ー！ アマゾンの奥地で酋長の息子とアバンチュールしてきたんじゃないのかー！ その髪飾りは永遠の愛の証と聞いたぞー！」

「どの子がそんな風に話歪めたの!? カレ!? ちー!?」

「葉！」

「あいつめ……」

「アハハハハ」

パンパン、とパンくずのついた指先を払って、マキは窓から空を見上げた。もちろん、サンパウロ郊外の故郷の空とつながっている。

どこへ行つてなにをするのか。

ひよつとすると、あの雲のようにあてどなくさまよい続ける人生なのか。

……それって別に悪くないんじゃない？

……と、思えるのは帰る家があるからか。

ふと、朝の彼を思い出した。

家がまだ、家になっていないのだろう。

アタシにはあの家もあれば、ここもある。
幸せ者なんだな、
そう思った。

■ 一 二 兎を追う者

——放課後は練習。本日はウォームアップの後、オフェンスチームとディフェンスチームに分かれての、8―8紅白戦。

女子サッカークラブチーム「ミラクルズ」は高校1年から3年までの選手一六人で構成される。現在はお正月に行われる女子クラブチーム日本一決定戦、「ク

イーンズカップ」目指して猛特訓中。

そんじよそこいらの草チームとは違うのは、昨年度方予選を突破し本戦に出た実績があることと、現役ユース代表を二人も擁していること。優勝候補は大げさにしても、強豪、とぐらいは言つていい。

指揮官、上町大地は鋭い目つきで、ジツと腕を組む。キョロキョロと見るのではなく、ボールサイドを眺めるように見ている。それでいざ講評や分析が始まると微に入り細を穿つのだから、不思議だ。

真横に立ち同じくゲームを一生懸命見ているマネー
ジャー住吉古都。

「……やっぱりミラクルズは、攻撃のチームですねえ
……」

いつもどおり、というか、オフエンスチームが押し
まくるのをディフェンスチームが必死で防ぐ。

胡桃を展開軸にどっしり置いて、その周りを可憐・
ありす・ナナが自由自在に動く。個々の能力が高いこ
ともあるが、実戦でいつも組んでるのが大きい。

「……いや、よく守れてるよ」

実戦で組むといえはディフェンスチームの4バック、右から明日葉・蘭・もも・流乃もほぼ固定スタメンであり、そう簡単にはゴールは割らせない。

「問題は逆側だ、と思う。特にDTの攻撃」

本日のオフエンスTの守備は美緒をセンターに、はなことエレーナが両翼、GKに忍。ディフェンスTの

攻撃は、マキと愛の2トップをユミ姉が下支えする。

（GKは千里）

「三人で守つてるところに2トップだから、ちよつとギャップ作ればすぐ裏へ抜けられる。ユミ姉からのパスは期待できなくても、もものフィードもあれば流乃と明日葉のクロスもあるわけだから、チャンスメイクはそう難しくはない……はずなんだけど」

大雑把に言えばゴール前が四対四、逆のゴール前が三対三になっているわけで、同数なら攻撃側のチャン

スと言える。

「ユミ姉さんところがキャプテンだと、だいぶ違うんですけど」

「いや、あの人は反則みたいな人なので、それでは腕いや脚が上がらん」

「ふふっ」

美緒キャプテンはスイッチが入ると「どんな手を使つてでも」チャンスを作ろうとするので、周りには思わずそれに仔犬のように従ってしまう。それでは、自主

性や創造性の訓練にならない。

事実、ちよつとプレーが途切れたところで、愛がマキと手振りを交えつつ言葉を交わしている。

下がるか、サイドに開いてチャンスを作ってくれ。

わかった。

そんな感じだった。

ゲームが再開されると、早速ユミ姉がボールを奪い、ももにリターン。それをポーン、と右タッチ奥めがけて蹴ると、そこに、マキ。

「チャンス！」

ピタリ、合うとそれを拾って、ゴール目指して真一文字にドリブるマキ、美緒の指示を待つまでもなくエレーナが守備に走り、真正面着。

「クロス！」

さっきの今だったからか、愛は万全の体制で美緒の背後におり、今上げればオフサイドは取れない上に美

緒の迎撃にもわずかに時間的余裕がある。

……だがマキは上げず、エレーナの正面でピタリ。

突破してマイナスのクロスは、それはそれで選択肢である。愛、背後を取られたことに気づいた美緒と駆け引きをしながら、マイナスに折り返された時に対応するポジションを探る。後方からユミ姉に中央守備を任せた蘭も駆け上がる。

だがエレーナもマキの縦突破は十分警戒している、いいポジション取りで内側へ切れこむ色気を誘いつつ、

簡単には縦にも走れないようにプレッシャー。

持つて、持つて、持つて……

「あーだめだ」

ようやくその右を大回りで駆け上がる明日葉、そちらへ、パス。すぐマキを捨てそちらを追うエレーナ、マイナスのクロスを上げた瞬間に脚に当てて、外に出した。

「……持ちすぎ、ですねえ」

「んー……」

ウイング、もしくはサイドハーフの第一の存在意義は「突破」であり、敵の陣形を突き崩してナンボ、だ。いかに一人を抜こうと、その向こうをガッチリ固める余裕を持たれてしまつては、そのプレーの意義は薄い。

「調子に乗つてゐる時のキレのいいプレーは破壊力抜群なんだけどね。なんかこう……」

フオローするでもなく呟くと、小首を傾げる大地。

「まあオフエンシブハーフはあんなもなかなかあ……」

「でも、コーチが首かしげるのわかります、ナナさん
だと同じことやってもこんなにモヤモヤしないですよ
ね」

「うん。」

あーそうだね、こつとん偉い。そう、ナナだとたぶん、今のだと、『この選択肢しかない！』と言わんばかりに送るんだよね。だからこつちも、『行け！』つて思う」

「あつ、そんな感じですよ！」

「マキなら、あそこからでもいろいろやれるはずなんだよ。エレに突っかかってもいいし、明日葉囿に中へ切れてつてもいいし、あの間合いなら無理矢理クロスを中央に送つてもいい。それこそロングシュート気味にね。パワーあるから」

「そうですね」

「それなのにえらくあつさり、ポイとボール渡しちゃうから、なんかこう……そうだ、見た目ほど積極的じゃないというか、おとなしいというか、安全志向というか」

「そんな感じですよね。外見は物凄いウイングみたい

ですもんね、ふふっ」

「そうなんだよ、実際身体能力もかなり高いのに……
ああ、もつたいない」

「あー……だから勝ちゲームで『かき回せ！』って言
われた時はすつごくイキイキするのかもしれない」

「あー……そうだね、そういう時はまさにサンバ・ク
イーンのように暴れてる。

けどそういう場合ばっかりじゃないしね。ていうか、
途中投入は困難を打開して欲しいから、やるのであつ
て」

「第一そんな時はウチのチーム、みんなそうですし

ね」

「そうなんだよお調子者ばかりで、ホント困る」

まあ一番のお調子者はコーチだと思いますけど、なんてことは口に出さない。

「……まあ中途半端な使い方してる僕が悪いのかなあ。中盤なら中盤、前なら前、って決めた方がいいのか……」

「そんなに違うものなんです？」
「使う方と使われる方だからね。どこでも苦にしない

人もいるけど、どちらかが苦手な人もいる」

「心構え、みたいなものです？」

「持って生まれた性格もあるかな」

「あー、じゃなおのことマキさんどっちかわかんないですよね」

「そうそう、ラテン系のじゃじゃ馬かと思えば意外にマトモだからね。意外っていうと失礼だけど」

「そうなんですよ、胸元ガツバー開けてみじつかいスカート履いてるのに酒タバコ盛り場一切無し。日曜日は教会でお祈りですよ？」

「真面目だよ、漢字メモとか取ってるし」

「ええ」

どちらでも使える、というと聞こえはいいが、『二兎を追う者』という諺もある。

「でも、もう前線は足りてませんか？」

「いや、前線は疲労なんかもあるので、何枚でも欲しい」

「欲張りなんだから。」

私、右サイドバックなんかどうかな、って思うんですけど」

「サイドバックウ!？」

「守備的な明日葉ちゃんの代わりに。足速いしクロス巧いし、そう、むしろスピードに乗って勝負!で!」

「……」

大地、顎に手を当てちよつと考えて、

「駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ」

「すつごいダメ出ましたね」

「守備が粗すぎる。マキの守備は穴がありすぎるんだ。とても最終ラインでなんか怖くて使えない」

「だって、流乃さんだって」

「流乃は戻ってれば守れるから。戻らないだけで」

「同じじゃないですかー！」

「いや……いや、だいぶ違う。居ないなら埋めればいいけど、居て抜かれると辛い」

「そうなんですかあ……私は、プレイヤーではないのでわからないですけど……」

「うむ」

まあ確かに、素人考えかもしれない。「ぼくのかんがえた最強ちーむ！」に攻撃のスターばかりを並べる

ような。

——またボールがマキに渡った。エレーナが余裕で
応対する。今回はサーツと早めに明日葉が駆け上がり、
ユミ姉がフォローに走る。

本来切り込み隊長として単騎傷だらけになって血路
を切り拓くはずのウイングが、これではまるで侍従を
従えるお姫様だ。

しかし今回も、じっくり構えて役者が揃ったところ
で……

バンッ！

思いつきのようにゆる〜いロビングを中央に上げた。
愛が食いつきに走るが、美緒が邪魔する、うちに飛び
出した忍が、悠々キャッチ。

うなだれるマキ、一応手を上げて謝る愛、何事もな
かったように定位置に戻る明日葉とユミ姉。

「「ちゅーとはんぱな……」」

こりやなんとかせなあきませんね、思わずコーチと
マネージャーは顔を見合わせて同じ言葉を、呟いた。

ロッカールーム、マキは早速、さつき大地に言われた問いを念頭に、諸先輩方に訊いてみた。

留学生をやつて得た知恵といえ、ば、「わからなければまず聞け」。問題点がどこかもわからないうちから、考えることは無駄である。

まずは二ホンを代表する司令塔、とおだてつつ、ナルミ・シショウ。

「……あ？ ゴールかアシスト、どっちが好きか？」

「ウン」

「そりゃー……うーん、なんかウチの場合は、ぜんぜん別モンなんで、どっちが好きとか、無いんです。

そりゃゴール決めりやテンションあがりまつせ？

せやけど、FWにゴール決めさせた時の『ウヒョー』
って感じはこれがまた、もう！」

「ハア」

「なんて言いますのん、『ゲームを支配した』みたいなね、エラソーな感じと言いますかね。なんて言うん

やろなー……ああ、ウチの人おつたら巧いこと言うてくれんねやろけど」

「ワカラナクモナイ」

「なにより点奪った人間がニツコー笑って駆け寄ってくんのがたまりませんな。電車で席譲るんの百倍ぐらい盛り上がる」

「ナナらしいネ……それって、昔から？」

「へ？ あ、うんまー……そうですね、子供ん時から。もう、だから、生まれ持ってウチはオフエンシブハーフなんですって！」

ナナは胸を張った。伊達や酔狂で「日本一の攻撃的MFになりたいから」と、名門校のお誘いを蹴ったわけではない。

ではお次は、灼熱のストライカー、カレン・センセイ。

「はいっ？ ゴールとアシスト、ですか？
そんなの、ゴールに、決まってるじゃないですか！」

目を剥いて何を愚問を、と言わんばかりに突っかか

る。

「アシストなんて……あたしにとつてはどーでもいいーんですよ、なんていうか……そう、普通のパスと同じで、出した瞬間、それが誰かのゴールになろうが敵に渡ろうが知ったこっちゃないというか」

「フムフム」

「ゴールとは、ぜんぜんそんな、比べるとか比べないとかって次元の話じゃないです。」

いやそりゃ、結果的にアシストになって、点入って、チームが勝てば、それは嬉しいですよ？ でもそれは

全然別の話かなあ」

「でもこう……例えばカレンのシュートが弾かれて誰か詰めて、ほとんどカレンのゴールだ、っていうようなのも、あるでシヨ？」

「あーありますね。でもそれはその人のゴールだなあ。あたし的には。ていうか、あたしもそういうの貰うことが多いんで」

「ナルホド。じゃPKとかも？」

「ももちろんもつと蹴りたいですよー！ 1点は1点です！ ……でも、まあ、キャプテンですよ、ひひっ」

「ダヨネエ」

……着替えながらマキは考え込んだ。事程左様にM
FとFW、中盤と前線では全く違うのか。

アタシ、そんなこと、考えたこともなかったなあ……

……

シュートが入って嬉しい、クロスがピシヤリと決ま
って嬉しい、似たような喜び、だ。

こういういい加減なことでは、やはり道は極められ
ないのか。シノブが言ってたみたいに。

(……むずかしいナー！)

訊いてなんだかますます、わからなくなつた。と同時に、情けなくなつてきた。

『ゴールとアシスト、どっちが好き？』

こんな簡単な問にさえ答えられない、自分がマキは、肩を落として家路についた。

■ 少年たち

——翌日、今日は練習が無いので早めに帰る、と。

例の公園で子供たちがワイワイと遊んでる中、一人離れてあの石のベンチに座る、あの子。

服はもちろん違うが背中印象からして間違いない。
マキ、ほおっておけなくて。

「……ヨ！」

「っ！」

ポン、と背中を叩くと振り返る、不審と驚きの色に、
かすかに喜びが交じる。

「また独り？」

「……ん」

「今日はサボってないだろーな！」

「行つたよちゃんと。お姉ちゃんこそ今日も遅刻した
んじゃないの」

「ハハッ、今日はバツチり一分前サ」

「……」

そこかしこで遊んでるグループが居る。中にはもちろん、サッカーも。

「……あれ、入れてもらいなヨ」

「……いい」

「なんだ、全然知らない連中か？」

「……同じ学校……だと思うけど」

「じゃーいーじゃん。サッカー、多い方が楽しいから断られないぜ？」

「……」

「オオーーーイ！」

「わっ、ちよっ、ちよつと！」

マキは引きずるように彼を連れ、ボールを追い掛け
回す一群に声を掛けた。

「……サッカー、やりたいんだヨ！ 二人、混ぜ
て！」

「ええっ!?」 「なんだなんだ」 「えーっ……」
一瞬芳しくない反応の中に、

「……あつ、この人、ミラクルズの補欠の人だ！」

「はっ？」 「なにそれ」 「えっ!？」

「たはは……ホケツか……」

が、知ってりやあ話は早い。

「ああそうとも！ いちおー、全国大会出てんだ

ぜ？」

「「おおーーっ!!」」

まあこのぐらいの男の子というのは犬猫ぐらいの脳みそしかないので、非常にわかりやすい。

胡散臭げだった目が「全国大会」の四文字でいきな

りキラキラ輝き出す。

「ちよつと身体動かしたいんだ！　なあいいだろちよつとぐらい！」

「あ、い、いいですよ……な？」

「あ、うん」「いいよ」「はいー」

「ヨカッタ！　じゃあこの……えーこの……」

……えと、名前なんだっけ？」

「あ……亮太。麻生亮太」

「リョータも！」

——いざプレーが始まると、さすがに文字通り大人と子供。

簡単にボールを奪うや華麗なステップで寄る相手を翻弄し、大きなコンパス深い切り返しで、すがりつく少年たちはただ無様に滑り転がるばかり。

思う存分遊んだ後、おおげさにホップ・ステップ・ジャンプを刻んでゴール真正面、

「ダッシャー……ッ!!」

思いつくそ左足で擦り上げるシュートが、GKを襲う。

「ヒッ！」

思わず身を縮め避けるキーパー正解、見たこと無いカーブを描くシュートは、キーパー君が立ってた位置をトルネードのように巻き込んで、遙か後ろの公園の金網を、ガツシャーン！ビヨンビヨンビヨン……

「「すっげー……っ……っ……」」

伝聞を現実で裏打ちされて、もう少年達のピュアなハートは奪われっぱなしである。

プレーの華やかさもさることながら、年頃のボインバインのお姉さんが胸元の開いたブラウスと短いスカートを振り乱して大暴れするのだから、ハートのピュアでない部分も気が気でない。

ちなみにマキはいついかなる時でも暴れられるように
たいてい一分丈スパッツを着用しているのだが、それ
は彼らに伝えない方がいいだろう。彼らぐらいの歳の
男の子にとってスカートの中に入っているのはパンツ
ではない。

夢である。

「……ヤマちゃん、おれがキーパーやる！」

ちよつと小太りだが気迫ありそうな子が、慌ててカ
バンに走ってGKグローブを取り出した。ということ
は……

「マツツンは少年団入ってるんです。巧いですよ！」
こういう子居るよね、大人に説明したがる子。

「……ククツ。ヨウシ……イッチョウ、モンデヤル
カ！」

「来いッ！」

オウ、いい姿勢。まあもちろん本気を出せば無理から
ゴールするのは朝飯前だ、が。

マキはふと、思い出した。

ゴールとアシスト。

そうだ。

「……リョータ！」

「ん！」

亮太が走る。サツ、とボールホルダーに身体を入れてキレイに奪う。

おお、やるう。やつぱ結構やってんだ。

サツ、と手を挙げるとぽーん、とパスが出た。

ぴたり、脚に吸い付くような優しいタッチ。寸分の狂いもない見事なパス。その姿勢も、昨日のミランのユニならまるでアンドレア・ピルロのような、と言う

と褒めすぎか。

このボールなら、なんの工夫も要らない。

右足ワンタッチで左足前に落として、

「シャアッ！」

「……フンツ!!」

ナメてたわけではない。が、すこしテキトーすぎたかもしれない。コースが甘くて、マツツン君が見事に両手パンチングではたき落とした。

「マツツンスゲーーーーーッ!!」

「ヤッターーーーーッ!!」

負けは負けだ。確かに悔しい。

「ヨッシャア! もう一度ダーーーーッ!」

「来いッ!」

彼の声はちよつと震えていた。たぶん、生涯最強の敵を前にして、テンションが天井なのだろう。

ヨーシ、今度は。

ボールの奪い合いにわざと参加せず、すこし離れた位置で見守った。

自軍の少年のひとりが奪った。

「パス！」

手を挙げる、もちろん出てくるポテポテのパスを拾って、ルックアップ。目が合った。

中央のスペースを駆け上がる亮太。

「イケッ！」

パスを出す。いつもどおり強めのパス、それを難なくトラップし、ドリブルを始める亮太。

団子が、ワーツとそれを追う。

マキはこそそと陣地を進めて、取り囲まれ今にもボールを奪われそうな彼に、

「ワン・ツーツ！」

指示を出した。

もちろん試合じゃできないアホな指示だが、亮太は応えて、すぱーん、と先ほど同様のいいパスをくれた。

また団子がワーツ、とボールを奪いに来る。

ためて、ひきつけて、こらえて、

リターン!!

リョータに返った。マツツンと真正面、一対一。鋭い振り脚に反応するG K、が、彼は最後の最後でキュッ、と足首を捻った。

ふわり

ゆるゝいループ気味のシュートが、G Kの逆を軽やかに破った。

「ウワウオウーーーッ!!」

マキ思わず大声で叫ぶ。オシヤレこのうえないチツプ・キック、こんなのチームでもなかなか見れない。

ニコ……とはじめて笑顔を見せたりヨータに、駆け寄って抱き締めた。

「ナイツシューーーーーッ!!」

ギュギュギュギューーーーッ……

ああ、ナナの気持ちがよくわかる。あの「ニコ……」がたまらなく、嬉しい。

「わ、わわ、わわ……」

でもその豊満な胸に顔埋められたりヨーチゃんはこれそれどころではない。

トラウマもののドギマギ・タイム。

「すつ、すげーなおまえ！」

「お姉さんも凄いいけど君も凄い!!」

「なんだよケーケンシヤかよー!!」

「ちくしょう、やられちまったぜ……おまえ、見ない顔だな、どこに住んでんだ」

「あ、ああ、僕、引っ越してきたてで……」

——その後もしばらく、ストリートサッカーを愉しんだ。日が傾く。そろそろ帰らなきゃ、という子が出てきて、

「……オウ、みんな、今日はアリガト！

楽しかったよ!!」

「いいえ！」 「こちらこそ！」 「また一緒にやってくる
ださい！」

すっかりみんな、遠い異国から来たサッカーの女神
様の虜である。素直でよろしい。男の子は元服前まで
が華だよね。

「アツ、そうだこれ……配れって言われてんだ」

マキはカバンから、ミラクルズ・トレーディングカードを取り出した。もちろんプロデューサー空堀三十六謹製、専属カメラマン駒川匠の撮った超カッコイイマキのドリブル姿に、「19 MAKI」と入れている。裏面は制服姿の笑顔という、一枚で二度美味しい仕様。もちろん本人のサイン入り。

「ワーツ、カッケーツ!!」 「すごいすごい」 「もらつていいんですか!?!」

「モチロン!」 んで、今度の日曜試合あんだ。マルタマ公園で! よかったら、観に来てチョーダイ!!」

「はいっ！」 「いきますいきます！」

「マキさんも出るんですか!？」

「ウ……ん？」

エー……アタシはヒミツヘーキなので、チームがピ
ンチになんないと、出ない！」

「えーっ……」

「アタシが出ない時は、相手が弱いってことなので、
これは、喜ばなきやいけないんだ。つまりアタシは、
ポリースマン」

「はあ……」

亮太が、ひとりクスクス笑ってる。

「ちなみにその19番は、10番と9番を合わせたスーパーナンバーだよ。なかなか簡単に付けられる番号じゃないぞー！」

「ホントですかあ？」

さすがにこのへんになると小学生とはいえ高学年相手だと難しい。が、

「……あ。早く帰らなきゃ。もう時間ヤバイ」

「あ、オレもオレも」

「じゃマキさん、さよならー！」

「僕も帰ります、また遊んでくださーい！」

「バイバイ!!」

「オーウ！　チャウッ！」

三々五々、子供たちは暖かいお家へと帰っていった。
残されたのは。

「……リョータ、帰らないの？」

「……マキさん、送ってくよ」

「いいよそんなのー！　ホレ、早く帰って晩ご飯しつかり食べろ」

「……お母さん、遅いんだ。仕事で。だから何時までに帰るとか、ない」

「ン……エ、じゃあ、ごはんは？」

「……お弁当買う。お金もらってる」

おそらく本人は普通にしゃべってるつもりだろうが、まるでしょげかえる仔犬のようだ。

「……ヨシ！　じゃあ、メシ喰いに行こつか!!」

「わ！　ちよつ、ちよつと……」

「ネーチャンも独りなんだー、って言つたろ？　ちよ

ーどいいから、さ！」

「……わ、わかつたよ……」

グイグイと肩を抱かれ引き寄せられて頬が胸に当たる。さつきまでの運動のドキドキとは違うドキドキが、喉の奥で高鳴った。

■ 旅人

——やってきましたはチームの定宿、ラーメンの『山嵐』。

「オウ！ マキやん！ マイド！」

「マイドーッ！！」

「おっ、なに彼氏？」

「ウン！！」

「……」

亮太は顔を真っ赤にするだけ。

「ワハハハハハ！ 見かけない顔だね」

「引越してきたばかりって。だからマスターのうんまいラーメンを食べさせてあげてよ！」

「マカセロ。」

少年、どつちから来た。東か、西か？」

「え……あ、ひ、東……かな」

「ヨウシ、ちよつと待ってろよ！」

「ワクワク！」

ヒゲの大將は早速寸胴に取り組む。

「……マキさん、よく来るんですか？」

「ウン！ アタシ、自炊って苦手でさー。何作ってもヘタなんだー。マズイのなんのつてー。だから最近は諦めてるー」

「はは……」

「ニホンいいよね、何食べてもすっごい美味しいよ」

「そうですか」

「ウン！ あ、また今度いつも行ってるお店教えただけよつか。んとねー、ケーキの『エス・ポワール』とか、ドーナツの『エンゼル・ドーナツ』とか」

「『エンド』は僕の街にもありましたよ」

「あ。アハハ。そつか、そだね！

それよりリョータ、止めなよそんなタニンギョーギな。トモダチでしょー？」

「あ、はい……あ、うん。」

マキさ……お姉ちゃん、どうして僕に、こんな親切にしてくれるんですか……してくれるの？」

「ああ……アタシさ、弟居るんだ。リョータ見てるとなんかちよつと思ひ出しちゃてさ。そう！ グーゼンだけど、名前がリョータローって言うんだよ。家族はリョーって言ってるけど」

「そうなんだ……」

「だから、オネーチャンって呼んでいいぞ」

「ふふっ……はい」

「あとはイタリア料理の『タベルナ風花』かな。あそこは美味しいネエ」

「あそこは美味しいな。はい、お待ち！」

マスターが笑顔と共にサーブしたラーメンは、澄んだ黄金色のスープに行儀よく麺が沈んでいた。具はもやし、白髪葱、細切り叉焼、だけ。

「ウワ、こんなの見たこと無い。これナニ？」

「鶏ガラと野菜たつぷりで採ったあつさりスープ。まあ喰ってみて」

「ヨウシ、イッタダッキマース！」

「……いただきます」

「……」

「……」

「ウンメー………ツ!!」

「美味しいです!」

「だろ!？」

鼻ヒクヒクさせる腕組みマスター。

「東の方だと醤油キツめだろ、あとは魚介系とか背脂チャツチャとかな。パンチもいいがたまにはアツサリしたのもよからうと……聞いてないな」

二人はもうズゾズゾが止まらない。ふんわり優しい味なのに、バツチリ旨みが出てる。シャキシヤキの具がつるつるの麺を飽きさせず、いつもは存在感過

多気味の叉焼も今日はスープの脇役に徹する。食べ始めるのと、お腹がぺこぺこに減つてたことにも気づく。

ニヤリ笑つて次の準備に向かう、職人。

「ウマイな！」

「うん！」

「ホラ、いい街だろここ！ ラーメンもウマイし！ キレーなネーチャンもいるし！」

「……ふふふつ。そんな早くわかんないよ……」

「……アタシもさ、最初の何日かはすつごく後悔してさ、もうどうやって留学無しにして帰らせてもらおう

か、つてそればっか考えてた」

「……」

「けどまあ、こないだ言っただけどトモダチできて、ガツコ楽しくなって、勇気出して街歩いて知らない食べ物食べてたら、美味しいのもあつて……」

だからまあ、しばらく、そうだ、タビビトみたいな気持ちで、楽しめばいいーヨ」

「……ありがとう、マキさ……お姉ちゃん」

「アツ、ほら、ハナミズ出てるぞ。」

「……ホラ」

目の前のティッシュを抜いて、鼻頭に当ててやった。
亮太は照れながらゴシゴシ擦る。

照れ笑いが可愛い。やっぱ人間基本的に、眉間に
縦ジワはよろしくない。

「サッカー、結構やってんだろ」

「うん。向こうでチームに入ってた。お姉ちゃんも凄
いね。プロみたい」

「アツハツハ、おだてるなよー。ぜーんぜんさー。ホ
ケツホケツ」

「そうなんだ。お姉ちゃんがベンチって、強いチーム

なんだね」

「まあネエ。ユース代表なんか居るからネエ」

「わ、わあ、そうなんだ！」

「リョータこそなかなか巧いじゃん？ パスとか、ピルロみたいだったぜ？」

「ふふふつ、おだてるなよー、だよ。」

でも、セリエA好きなんだ。ピルロみたいにできなかったらなあ、つて……」

「オウ。ネーチャンはイタリアは窮屈であんま好きじゃない。リーガの方がいい」

「ふふつ、そうみたいだね！」

「でもあのチップキックはチョーオシヤレだった!」

「あれはね、トツテイのマネ。えーつと……『スプーン』とかって言つて、すつごく重要な場面のPKでも使うんだ!」

「へーッ!」

「あんなの一生使うシーンないと思つてたけど、お姉ちゃんが全部引きつけてくれてどフリーだったから、狙えたんだ。たぶんもう一生できないよ」

「アハハ、リョータはショーキヨクテキだなー。ワールドカップの決勝でアレをやるんだヨー!」

「ム、ムリムリ、絶対無理だよー」

サッカーの話に、花が咲いた。いつしか黄金色のス
ープも、すっかり消えていた。

「……はー……ごちそうさま」

「ン。ゴチソウサマでした！」

「お姉ちゃん、お金」

「ああ、いい、いい。今日はオゴってあげる！」

「そんな、悪いよ。ちゃんと貰ってるし」

「そのお金でサッカーの雑誌でも買いな」

「でも……」

「オネーチャンこう見えてもお金持ちなんだぞ。車庫にはクルマがいっぱいある！」

トラクターとかトラックばかりですけどね。

「へーっ……」

マ……お姉ちゃん。家のみんなのこと……思い出さない？」

そう問う彼の目は、ようやく十かそこらになった、こどもの目だった。

「思い出すよ毎日。つてか週に何度も電話する」

「その……寂しく、ないの？」

「んー……」

マキは少し、考えた。

「サビシイ」

「やっぱり……」

「……でも、その寂しさのおかげで、新しいトモダチがたくさんできた。リョータもね」

「……」

「それにチームで、サッカー、楽しめてる。みんなと一緒に真剣に練習して、試合で震えるぐらい本気になつて……それ、こつち来たから。向こうでだつたら、こんなことになつてない、と思う」

「そうなんだ」

「ウン。ウチ、農園だから、たぶん普通にウチのみんなの手伝い、してたと思う。お茶摘んで、乾燥と発酵と荷出しやつて……もちろんそれはそれで楽しかったんだらうけど……だから」

マキは少しだけ先輩旅人として、少年に語る。

「ニンゲンは、いつか旅立たなきやならない日が来る。
リョータはそれがちよつと早かつただけなんだ。だから旅に出たら……その旅を、楽しめ」

「……」

まるで自分に言い聞かせるように。

「……けど」

だが少年にはまだ、勇気がない。いや、準備が、できてない。

「……僕、お父さんと、離ればなれなのが、さみしいんだ。お父さん、僕に、サッカー、教えてくれたんだ。いつつも一緒に練習してくれて、いつつも試合観に来てくれて、いつつも一緒にお弁当食べて……でも、もう観に来て……くれないんだ」

ぽたり、と握った拳に雫が落ちた。
わかる。

わかるがマキは、お姉ちゃんになった。

ゴシゴシ、その艶やかな黒髪を、撫でてやる。

「リョータ。男の子が、そんなこと言うな」

「え……」

「ウチのキャプテンなんか、ちっちゃい時に、リョータよりずっとちっちゃい時に、お父さん死んだぞ」

「……」

「コーチだってお母さんもう居ないんだ。お父さんと弟スペイン行つて、毎日独りだ」

「アイも、両親とも遠い外国行つてて、おばあちゃん

と暮らしてる。シノブも、お父さんとお母さんが別居してて、お母さんに月に一回ぐらいしか会えなかった」

「……」

「寂しいの、わかるよ。」

けど、自分だけが特別寂しいわけじゃ、ないんだ」

「……だけど……」

思わず口を尖らせる。

そんなこと言われたって、いまこの寂しさや辛さが、消えてなくなるわけじゃない。

「お父さん居なくて一番さみしいのは、お母さんだと思うぞ。男なら、お母さんを慰めてやれ！」

「……お母さん、お父さんと喧嘩ばかり、なんだ……」

「あ、あ、そなの？ んー……まあ、なんとかしろ！」

「……」

フクザツな表情で空の井の底を見つめる亮太。

まだ早かったのかな。普通にお布団にくるむように

慰めるべきだったのか。

オトコノコって、難しい。

「……ごちそうさま。帰ります」

「ん。そうしな」

目を伏せたまま、目も合わせず。

「じゃあネ」

「……さよなら」

駆け出すように、少年はお店のドアを押して出ていく。残されたのは、空の井二つ。

マスターが、そつと下げに来る。

「……言い過ぎた、カナ」

「甘やかしすぎだ。ハハッ」

男の先輩の言葉にほんのすこし、心が軽くなった。

弟

——狭い部屋のロフトベッドに、ゴロリ。

「日本へ」と決まった時、オオジーチャンは大盛り上がりで、豪華マンションを買ってやると言い出したが、断然拒否した。それではまるで遊びに行くようなものじゃないか……

と、大見得は切ってみたものの、いざ来て「単身者

用」なるワンルーム・マンションを見て驚いた。

「納屋？」

だつて、ウチのはもつと大きい。「ウサギ小屋」というのは比喻でも何でもなくてそのままだ。いや、ウチのニワトリ小屋の方がここよりおつきいよ！

が、『住めば都』がマキ最近お気に入り。の諺。

住み慣れるとこのカプセルみたいな空間が、囲まれてる安心感みたいなものがあつて、なんとも居心地がいい。繭の中にいるサナギ。

るる……と持ち歩かない携帯電話が鳴った。手を伸ばして取る。

『姉さん？』

「おー、リョータ、じゃないリョー！ 珍しいね、リョーから」

『うん』

ハニカミ屋で優しい弟は、いつも家族の電話では最後のほうで二言三言交わすだけだ。

『……週末ね、レースで三位になったんだ』

「おおっ!? 表彰台じゃん! やったネ!! シャンパ

ンフアイトとか、やった?」

『うん。一応。ベトベトになるね、あれ』

「アハハッ!

よおし、次こそ、優勝だな!!」

『……それで、レース止めようと思って』

「へっ?」

『……僕、才能無いよ。』

「いやいや、そんなこと言うなよー。みんな応援してるよ? まだまだこれからじゃないか、まだ若いんだ

し、ニホンのタクマ・サトーなんて自動車レース始めたの大学生だぜ!？」

『知ってる。けど、ダメだよ。僕一生懸命やったけど、運に恵まれてサポートに恵まれても、これが精一杯だった』

「いやいや、そんな」

『……勉強して、農園継ぐよ。』

だから姉さん、姉さんは好きなようにしてくれていい』

ハッ、とした。

ぼーつと好きなことばっかりやってると思ってた弟が、そんなことを……

「バツ、バカ、ナマイキ言ってるじゃないよ。そんなことリョーは考えなくていいんだ。そんなことと、こんなことは、別だろ!？」

『別じゃないよ。僕がレーザーになったら、姉さんがお婿さん取らないといけないじゃないか』

「いやいやそーだけどー」

『……ふふつ、それともアテでもあるの?』

「ああつ、バ、バカにすんなよ、お姉ちゃんだつてな、

こっちで恋人の一人や二人、居るんだ」

い 、「
い め
い わ
い |
い |
い |
い |
い |
い |
い |
い |
い |
い |
!!! |
」 に
い
い
い
い
い
い
い
い

スピーカーホンで家族みんなで聞ってる、つてことをすーっかり忘れてた。この声はもちろん……ゴツ

ド・ファールザ亮太郎。御年九〇を越えてなお矍鑠。

お氣付きの通り、「リョータロー」という音を長男が継ぎ続ける一家で、亮太郎、遼太郎、龍太郎、涼太郎という四代。

『そんな輩が居るなら早う連れてこんかッ!!』

「いやいやいやいや、いやあの、えー」

『なんじゃ、口から出まかせか……』

「いやそんなことないよッ！　居るけど、まだ、そんなんじゃないから、そんなことしたら、嫌われちゃう

……」

『そんなもの恋人でもなんでもないじやろうが。マリ
アの厚かましさを覚えとらんのか？　龍太郎が帰つて
きたと思つたら呼んでもおらんのにくつついてきた
ぞ？』

『お爺様!!』

母マリアはこれぞラテンのなんにでもアグレッシブな女性で、まあのもんぶりものの父が「引っかつた」と言っている。

『パメラにそんな人がいるなら、おとうさんも見てみたいなあ』

こんな感じ。

「いやいや、だからね、そのー……えー……い、今は

全国大会に向けて、そんなこと言ってる場合じゃないから！

そう！ 今問題は涼太郎のことだよ、そんなこと気にするな、ってオトーサンもオカーサンも言つてよ！」

『マアイはそのほうがいいもの』

『おとうさんもその方がいいなあ』

「ダメだこの夫婦ー！！ ムスコ・ムスメのしあわせを
考えてよーッ！！」

『『それが一番しあわせに決まってるだろ』でしょ』
「はあ……」

その後も長い時間、喚きあつた。

——弟はもう、アタシが留学するつて決まつた時から考えてたらしい。キシワダ家の子は外に出ねばならん、と言つても、それは今まで、家を継ぐ男子の話だった。

姉にその役をさせるのか、姉にそれをさせて、お前はなにをするんだ。

やりたいことは小さい頃からひとつしかなかった。アイルトン・セナのように、ネルソン・ピケのように

フェリペ・マッサのようにF1で走る。が、残念なことにそれは無理なようだった。だったらもう、やりた
いことなんか無い。だから、姉に代わって継ぐ。単純
な理屈だった。

『……いつも応援してくれたし……』

ほんの少しの、恩返し。

そんな言葉は使わなくても、声の調べから、柔らか
く伝わった。

男の子はいつの間にか、大きくなっている。

「……バカ……」

電話を切った後、マキは暗くて近い天井を長い間、見つめていた。涙が筋になつて、枕に吸い込まれていた。

本当に久しぶりに、帰りたい、と思った。

写真

伝言ゲームは恐ろしい。

最初の話と真逆の話が流通しちゃうなんてこともありまえにある。

「……イヤー、昨日の夜電話でさー、こんなことになっちゃってー」

「あはは、そんな嘘つくからだよ」

「ウヒヒ、ダイチの写真でも送っちゃおっかな」

「止めといた方がいいわよ、ご家族が本気にしちゃうマズいわ」

「必要以上に美男子だからね、盛り上がっちゃう」

……これが。

胡桃↓購買で会った千里↓可憐↓明日葉（ここがポイントだと思われる）↓ありす↓古都↓三十六。

「話は全部聞かせてもらいましたア!!」

「「うわあ」」

3年の教室ドアを引き千切らんばかりに叩き開けて
ご登場は空堀三十六、顔はめっちゃめっちゃ嬉しそう。

「なっ、なにどうしたのカラちゃん」

「わかりましたわかってますいやわからいでか、マキ
やんはワタクシめに全部おまかせくださればいいーんで
す！

ああ……この瞬間を私待ってました人生一七年この
瞬間そうすなわち！ラヴ・コメデイのド定番『恋人ご
っこ』の脚本を担当できまするこの栄光のル・マンな

日々をッ！」

「ちよつとー。誰か2年の暇そうなミラクル一座の子連れてきてー」

「まお相手は大地でいいと思いますええツラいいですからねなんといつても。まずは恋人同士をアピールするためにデート行くわけですよええもう一通り。家電量販店とかね。その後公園に行くわけですよ、夕方のもード満点の海辺の公園なんか。そこであなたイチャイチャしてるフリしてるうちになんとかなくホントに良い感じになっちゃったりなんかしちやったりなんかしちやったりするんですけどこの！いい瞬間お爺ち

やん寝ちやつてて見てないわけですからええもう。んでも
って最後は夜別れ際、『なーんかイマイチ恋人同士つ
て感じがしないんじゃないか』とか爺ちゃんに煽られ
て二人、キスですよキス、キス・シーーーン！覚悟
を決めて目を瞑り近づく二人の唇と唇……今まさに！
くつつこうとした、らそれはなんだか冷たく硬い感
触で、そうそれはお爺ちゃんの突き出した杖ッ！『……
フオッフオッフオ……お芝居はここまででよいぞ』
「うん、そこまででいい」

「ちよつ、ちよつと忍様待つて、ここはもう少し、も
う少し想像力の翼を羽ばたたかせて、こんなチャン

スなかなか無いんで」

「いや、ちよつ、サトル、オオジーチャン来るわけじやないんで、そんなことしなくていいつてば！」

「あれっ？ 来ないの？ じゃ空港で僕が『お初にお目にかかりますお爺様』とかなんとか挨拶して孫娘可愛さに錯乱したお爺様が黒服に命じて僕簀巻きにされて拉致されるシーンは？」

「ウチヤクザじゃないって！ 健全な農家だよ！」

「葉っぱ作ってるって」

「大麻じゃないよ紅茶！ もー、ラテンアメリカってだけですぐマフィアとか言い出すんだから偏見もいー

とこだよ！」

「……呼ばれて。

三十六とマキさんのマリアージュ・フォトを撮れば
いいの？」

「「チガウ」」

こんな短距離短時間でも伝わらないのか。

やってきたのは黒々としたフラッグシップ・デジタル
一眼も頼もしい、カメラマン匠。

「あつ、でもニセ恋人写真、撮ってもらったら？」

「エー、いいよう、そんな本格的にウソになっちゃうじゃん」

「だってもうウソついてるじゃん」

「では、不肖ワタクシメがお相手をば」

「シー……どうせ撮るならダイチがいいなあ」

「えーっ？ いーじゃないですかどうせウソなんだからー、って別にマキちゃんと撮りたいわけやないですけどもー。なんか寂しいわー」

「だって長く残るんだよ写真って。変な写真撮ったらあとで後悔するヨー！」

「変な写真てなんですかのん、ますますへこみますやん

か。だって、ねえ、みなさん、どうせ『ごっこ』なら、誰でもいいですよ、ねえ？」

「大ちゃんがいい！」 「上町君の方が」 「コーチ」

「『嘘から出た真』という言葉もあるからな、滅多なことではできん」

「あ・れー？」

「というか、空堀君だつてナナちゃん以外と例えば恋人ごっこするとして、私とだとイヤでしょ？」

「ユミ姉さんと？ ……いや、イケ、ますよ」

「なにその間」

「千里となら？」

「……………いや、だいじょぶです、ぼくああいうの、わりと」

「明日葉。」

「すみません、僕が間違っていました。たえ嘘といつても、ついていい嘘と悪い嘘がありますね」

「三十六、明日葉ちゃんとなら結構似合ってると思うよ、和風の顔立ちで」

「止めて止めて、止めて」

最近西九条家行くとやたら足止めされる。ご老公に気に入られすぎるのも考えものだ。が、それはまた別

の話。

——で結局、三十六が大地をおびき出して、マキと楽しく語らい合っているとところを物陰から匠が激写する、という段取りに。

「……あ、マキさん」

「あーダイチいいところにー！ あかね、ちよつと相談があるんだけどー」

「はい、なんでしよう」

「一〇歳ぐらいの男の子と知り合っただけだね、引

っ越してきたばかりの。サッカーやってて、このへんでそのぐらいの子がサッカーやるってなると、どんなところがいいのかなー」

「ああ、あー……本気でやるならクラブのジュニアでですけど、そこまでじゃないなら地元の少年団かな……」

「ウンウン」

「……どう、どう？」

「いいかんじで撮れてる。……ただこれじゃ友達同士とあんまり区別付かないかなあ……」

「確かに……いやまあ実際そやしなあ……うーん、後ろからビックリさせて抱き合わせたりすつか！」

「そんな都合よくいくのかなあ」

「……ボーズ？」

「「ヒッ！」」

思わずカメラを後ろ手に、直立不動キオツケの二人。もちろん後ろに現れたのは、我らがキャプテン・長居——美緒。

「なんの悪だくみをなされておられるの・やら」

「いやっ、あのっ、そのっ、これはっ」

「三十六、ここは、ここは小細工小嘘小冗談無しで、
本当のことを、真実を」

「いや、いやそやけどこれ、嫁はんの前で浮気写真撮
ってるようなもんやぞ!？」

「んん〜？ なにやら聞き捨てなりませぬな」

「はいっ！ いや、あの」

「キャプテン、実はですね……」

匠が簡潔に状況を説明した。最近、街角で写真一枚
撮るのにも一々許可取った方が無難なもので、そのへ

ん手馴れたもの。

「……なんだ、そんなことなら協力惜しみませんよ私だつて鬼じゃないんだから。『嘘』だし」

「はい、もう、嘘でございます嘘でございます」

「要はすつごくニツコリとかぺつたりくつついたりとか、そういう写真だよね」

「そうなるね。できれば腕組んでたりとか、そんな感じが」

「まかせなさい。カメラ、構えて」

「あつ、はい！」

「……大地くーん」

美緒が声を掛けた。ハッ、と一瞬驚くマキに素早くウインク、陰の二人も身振り手振りで状況を説明する。

「あ、美緒、なに？」

「あのね、ちょうどマキちゃん居るから、いま流行りのペルー式サンドイッチを試してみたいなーと思つて

ー」

「ペルーしき？」

「はいマキちゃんそっち腕持つて」

言いつつ美緒は大地の右腕に自らの左腕をガッチリ絡める。慌ててマキも大地の左腕をそのように。

「せーの、サンドイッチ・サンドイッチ・ヤッホー・ヤッホー！」

「あ……さんどいつちさんどいつち・やつほー・やつほー」

押しくらまんじゅうの要領で、両サイドから挟み込む、挟み込む。

「もつと元気よく！ サンドイッチ・サンドイッチ・マチュピーチュ・チチカカ湖ッ！」

「さんどいつちさんどいつちまちゅぴーちゅちちかかこつ!!」

「えつ、ちよつ、なに、これ、ちよつ」

「ナースカ！ クースコ！ リヤーマ！ アルツパカ！」

「アハハハハハハハ！ツ！」

「えっ、えっ、えっ」

もはや腕にしがみつくようにしてグイグイ押し上げる、なんだか楽しくてニコニコしちゃう、大地も困りながらも変な歌に思わず笑う。

「……鬼や……あれを鬼と言わずしてなんという……」

「勝利条件を満たしながら自分の欲望も満たすなんて……あの人はカエサルか」

「しゃべってんとしてっかり撮りや！　ちゃんと撮れてなかったら後怖いで！」

「タクミ&J1をナメるな——！」

カシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤ
ヤ……

「……ふう。今日はこんなもんで。じゃ、大地くん、
ありがと。またね」

「は、はあ……これどこで流行ってるの？」

ポ。ン。ポ。ン。ポ。ン。

美緒は自分のハートを叩いた。
マキは、笑いを堪え切れない。

「じゃ、じゃあダイチ、アタシも行くね。参考になりまチタ。ププツ」

「あ、はい、何も知らなくてごめんなさい」

「……さんどいつちさんどいつ……ぶつ」

しれっ、と拠点に戻ってきた美緒、ニコニコしながら、

「どう？ どう？」

「バッチリ撮れました！ 見てくださいこれ！」

背面液晶で写真を送る。

さすが匠、マキがこれ以上無い笑顔で大地の腕にす

がりつき、大地も微笑んでそれを見つめている、構図
角度レイアウトもちろんヒント・ボケなど問うまでも
ない完璧なショットが、次々と連なる。これで衣装が
タキシードとウェディングドレスなら、結婚式の写真
といっても誰も疑わないだろう。

が、

鬼の笑顔は見る見る曇って、鬼になる。

「……駒川君」

「はいっ！」

「君は……アーティストかも知れないけど、プロフェ

ツ・シヨナルではないね」

「は。あ、あのー、どこかお気に召しませんでしたでしょうか」

「私写つて無いじゃない」

「あ！ いやでも、これは撮影意図的には」

「三人を・撮つて・トリミング！」

「あつ……ああつ!？」

あまりの技術がむしろ災禍を招いた。匠ほどの腕でなければ確かに、三人まとめてつまり「美緒・大地・マキ」と撮らざるを得ず、そうすればそこから「大

地・マキ」の写真の副産物として「美緒・大地」の写真も発生する！

しかも腕組んでニッコーな恋人写真。似非だけど。

「もっ、申し訳ございませんっ！」

「馬鹿者ー！　だから、俺は、あれほどしつかり撮れと！」

「ばかものはむしろあなたです、空堀君」

「ハイッ!?」

「あなた、あなたがこの兵を使う士官でしょう？　監督の指示に、カメラが応えるのではないのですか？　監

違いますか？」

「はっ、はいっ！ まっ、まったくおっしやるとおりでございしまするでございしまする！」

「二人とも……」

「「はいっ!!」」

「修業が足りません。」

日々ますます、精進するように」

「「もうしわけありませんでしたっ!!」」

「ふふっ……じょうだんだよ」

目、見えないぐらい細いです。

たぶんまったく笑ってない。

スタスタとまた背筋伸ばして去る女傑を直立不動で見送って、二人。

「……三十六。僕が悪かった。おのれの腕に溺れた」

「何を言う匠。意図を見抜けなかった俺の未熟や。お前は一ミリも悪くない」

「三十六……」

「匠……」

「うわ~~~~~ん……」

道は、どんな道も、遠い。

■ フェジョアーダ

——週末土曜日、地方予選突破に向けて決起集会……
……という大げさだが全員揃ってランチ・パーティが
企画された。プロデューサー発案で場所は我らが上町
邸。

「こんちわー!」 「チーッス!」
「……あつ、ようこそ、デス!」

「わあ、エレちゃん可愛いねそのエプロン！」

「エへへ、そうですか？」

「外国人幼な妻みたいですー！」

「はっば、なんかおかしいそれ」

さすがに参加二〇人を超えるとさしもの美緒シェフの手にも余るもので、エレ、忍がアシストしてお料理当番。

三々五々集まるチームメイツ。

「……オーウ来たぜ！　ガハハ、これ差し入れ！」

「オウ哲っちゃん来てくれた？　入って入って」

「いいの、ボクも来ちゃっても？」

「アホウ、タカちゃんひよつとしたら明日の試合が最後かもしれないから今日楽しんでくれ」

「そんなー！　チームと縁切れるみたいな言い方しないですよー！」

「太陽はやっぱ忙しいの？」

「いまクアランプールなんかに居るわ。メールしたらめっちゃ悔しがってた」

男性陣は大地・三十六に加えてもちろん匠、それから援団副団にしてサポリーダーの千林哲哉と、放送部

にしてスタジアムアナの高安和輝。地方予選でも最後の二つはスタアナ持ち込みが微妙で、そんな話をした。

「……チワーツ！ あ、サトル、これオミヤゲ」

「おっ、なんですのんマキやんこれ、お茶？」

「ウチの。パッケージしてないから見た目悪いけど、味はイイヨ！」

「うひょー、シェフに伝えますー！」

一キロは入ってそうなビニール袋。これは呑みである。

「……うわっ、これ全部用意してくれたの？」

「もつちろ〜ん。お稲荷さんと海苔巻きがわたしー。
関西風具だくさんちらし寿司がエレちゃ〜ん。そして
握りと手巻き寿司の用意がキャプテン、で〜す！」

ピシッと和装に髪アップ、襷掛けも凛々しい忍様。
口調は軽いが腕は確か、でなければ美緒が手の掛かる
巻や稲荷をまかせるはずもない。

「ああんもう待ち切れない！　いただきまー」

「誰かも先輩にアイマスクかぶせろー！」

本日のメニューはお寿司づくし。お寿司が日本人に好まれるのは魚＋米という本能に訴える点もさることながら、カラフルで見てるだけで楽しくなる点も、だろう。

ももなどもう乾燥よけに掛けてあるラップごと飲み込まん勢いだ。

——全員揃ったところでお茶お水ジュース各自好きなものが配られて……司会は高安。

「はい、では皆様本日は以下略、早く食べたいですよ・ねー！」

「「はい!!」」

「では我らが指揮官上町大地様からご挨拶と乾杯の音頭だけ」

「あ、はい」

大地はぐるり一周、見回した。

ニコニコ顔がびつしり並んでいる。

軽い感慨が去来した。

ほんの数カ月前、僕はこの部屋で独り、試合を観に

行こうか行くまいかうじうじうじ悩んでた。それが……

あの一步、出すか出さないかで、こんなにも人生が変わるなんて。

……笑った。

「……もうなにも、言うことないです」

「「ええ………？」」

「……だから、いつもの円陣で」

「「……おー!!」」

さすが我らがリーダー、って感じ。

「音頭は、せっかくですからサポリーダー、スタアナ、カメラさん、それからみんな。……どうぞ！」

「……ネヴァー・ギブアップ！」

野太い声が闘志を掻き立て、

「Go Ahead！」

エエ声気分を高揚させ、

「……あんど・どう……」

落ち着いた声の促しに、

「ミラクルズ!!」

みんなで応える。

杯を乾かす。

拍手が起きた。

「……さあ戦争じゃー！ー！ー！」

「「おおー！ー！ーっ！！」」

「……。」

……この勢いでボール奪いに行ってくれたらなあ……

……」

「「わはははははは……」」

冗談ではなく天然で漏れた指揮官の呟きに、笑いが

木霊した。

——数分ももたず大皿の握りが消え、山と積まれてたはずの助六が綺麗サッパリ無くなり、ちらしもほぼ同時に桶の底を見せた。手巻き寿司もすし飯海苔具材が見る見る消えていく。

が、もちろんシェフにとっては想定内で、

「は〜い第二セットはパーティーオードブル〜」

「わぁお!!」

揚げ物メインの腹にたまるモロモロを。これは楽しんで売り物を揚げまくったり茹でまくったりチンしまくったりしました、ええ。

「……先にこれ食べてもらった方が良かったかもねえ。あんなに時間と手間掛けて作ったのに、いっしゅん」

「ふふつ、でも、キレイに無くなって、ホツとしました！」

「『一番最初に一番美味しいものを』が鉄則ですよん。足りないぐらいでいーんです」

と言いつつ美緒、スープ皿を手にキッチンから現れた。

「……マキちゃん。これ。スペシャルメニュー」

「エッ？」

「……ア!!!」

フェジョアーダ。ブラジル名物、黒豆と豚肉の煮物。

「見よう見まねなので、お口に合うかどうか、だけ

ど」

「こつ、これはダメなの!!」

一瞬目を輝かせたマキが、その目をぎゅつと瞑って首をブルブル振った。

「へっ？」

「アタシ、こつち来る時、これ、これだけはブラジル帰るまで食べない、って誓ったから！」

「あら。」

それは悪いことをしました。じゃあ下げます」

「……まっ、待って！」

それ、捨てちゃうノ!？」

「ううん、冷凍してまた後日。まさかそんな故があつたら、みんなでいただくわけにもいきませんし」

「いや、いや、そんな、そんなもつたいないことは、しない方がいいんじゃないかナア!?　だって、作りたいのほうに絶対美味しいヨ！」

「もちろんそうですけど」

「マーキーちゃん。」

ムリしないで。ひとくちだけいただいちゃいなさい
よ〜〜〜」

ももが悪魔のささやき。

「グッ、ダメなの！ あかね！ オオジーチャンがね！ ニホンを出る時、ヨコハマでおソバ、食べて！『一旗上げて日本へ帰るまで、ソバは食わん！』と誓って、で、農園ができたの！

だから！」

「あら、ゲンの良い誓いなんだね。」

で、マッキーは何を誓ったの」

「……ハ？」

「おじいちゃんは一旗あげることを賭けたわけでしょう。マッキーは何を賭けてるの」

「……あ、イヤ……アレ？」

「なにより私が食べてみたいからそれちよーだいキヤ
プテン！　ね、ユーミ！」

「ええ、もちろん私も。ね、くー」

「食べない理由がない。プリーズ」

「はいはい、もういいから食べちゃえ。美緒ちゃんわ
ざわざ食材専門店行つてむこうの燻製ソーセージとか
仕入れてきたんだぞ」

忍が美緒の下げかけた皿を目の前に突き出した。

ふんわり香る煮物の香りは、懐かしいアレ。

目に映る茶色黒いゴツゴツした感じは、いつも食べ

てたソレ。

無意識がスプーンを取らせ、手が自動で一口分を口に運んだ。

「……」

固まった。

ぶわっ、と目に水が溜まった。
もう一口。

「……ボフッ！」

一回嘔いた。でも、ボタボタボタ……と涙を零しながら、手が止まらなくな、なった。
ガシャガシャ、ガシャガシャ。

塩つけが足りなかった。それは涙が補ってくれた。
いや、美味いかまずいかなんて、どうでもよかった。
今食べているのは、ふるさとだから。

——紅茶とお茶と珈琲でおしゃべりして、自分達の
ビデオ観て盛り上がって、マキの写真の種明かしでゲ
ラゲラ笑って、また持ち寄りのケーキとお菓子をパク

ついたて、最後は沖縄民謡でみんなで輪になって踊った。

ちゃらんぽらん・イズ・ミラクルズ。

夕刻いい頃合い、会はお開きに。後片付けに残る美緒。手際良く食洗機をフル回転させながら、大きな器は手洗いで。

一段落して、渋めのお茶を淹れた。旦那にも。
と、なにやら思案げである。

「……どうしました？」

「明日。カテナチオで有名らしい」

「また。せめておひさまが沈むまではお仕事のこと
は考えめさるな」

「あはは、ごめん」

笑顔で茶をすすり、あー、とため息。

まもちろん美緒としては、二人になつた途端通常モードに入るのは、嬉しいんですね？

「カテナチオ」は堅固な守備で鳴らすイタリア代表の
代名詞、「鍵をかける」という意味。

自分もお湯呑で両手を温めつつ、

「ソウル・フードで元気を出したマキちゃんでも使つて掻き回しますか？」

「いや引いて守られるとスペース無いからね。基本スビードタイプは使いづらい」

「冷徹ですこと」

「そうそう、美緒に聞こうと思つてたんだ。マキさ、FWとして使つた方がいい？ MFとして使つたほうがいい？」

「は？」

「いや今のままだと中途半端だな、と思つて。どっち

が向いてるんだらう？」

「向いてるも何も……それをあなたが決めずに、誰が決めるんですか」

「……あ」

そう言われりや、そうだ。

適性とか個性とか考えすぎて、もう一面の基本を忘れていた。

「マキちゃんは素直な人だから、使いたいところで使って、こうしろ！って言えばいいと思う」

「……かな。」

「なんだ、簡単なことだな」

「そうですよ、たいていのことは簡単なことです」

と、美緒独特の無根拠に得意げな表情をして、エプロンを巻いた。

「……ふふつ。じゃあ、帰ります」

「送るよ」

「あつ、いいいいいよ、まだ外明るいし……甘えちやおっかな」

「ん」

二人で、外へ出る。空気が冷たくて新鮮で、きもちいい。

「……ねえねえ、なにが一番おいしかった？」

「……これ言うとな怒られるかもしれないけど、フエジ
ヨアード」

「いやっ！　よかったでしょあれ！」

「うん。もつとしつこいかなと思ったら全然大丈夫だった。いくらでも食べられる感じ」

「本物は豚のしつぽとか耳とか入れるらしいんだけど、安全にバラやソーセージでいったのが功を奏した感じ」

「へーっ。あソーセージ美味しかった。野趣があつて」

「でしょう！ あれ、でも大地くん煮物あんまりじゃなかった？」

「そお？」

「肉じゃがとか筑前煮とか反応悪いよいつも」

「んー……」

母さんのと違うからじゃないかな、ってセルフ分析結果は、さしもの大地くんも握り潰した。

「ようし今度はペルー料理に挑戦してみよっかな！」

「ん、ペルーって、どんなの？」

「セビツチエって魚のマリネサラダとか。いま注目なんだよ、日本人の味覚にも合うんだって。スペイン風で、豊かな食材を使ってー、そう、牛のハツのね、串焼きとかもあるの！」

「へえーっ。それも美味しそう。」

あ、それでペルー式サンドイッチとか言ってたのか

「
ふふふふ
」

影がずいぶん長くなる季節に、
なってきた。

■ カテナチオ

「……カンザキが悪いんだぞ！ 『球技場はこつちです！』とか自信たっぷりにゆーから！」

「だっ、だって第一第二第三って三つもあるとは知らなかったんだよー！」

「しかも第一の次第三行って第二でしたってどんだけ無駄足なんだよ！」

「そ、そういうけど！」

「けどま、時間とか調べてくれたのカンザキだから。

急ごう」

「やっぱマツツンは優しいなあ！　そもそもマキさんが悪いんだよマルタマコーエン！　とだけしか言わないからブツブツ……」

「……」

自転車を駆る少年たちの前に、歓声が聞こえてきた。

第二球技場の入り口には立て看板に「クイーンズカップ地方予選　入場無料」とあった。鍵を掛けるのももどかしく、少年たちは観客席への長いスロープを駆

け上がつていく。

——予選は、正念場を迎えていた。ここを抜けば、
「全国」が見えてくる。

古都は、ビビっている。

いつもはベンチ前すぐに立つ上町コーチが、今日のはめり込んでいるのかだんだん前へ、斜めへ遠くなつていく。それも、明らかに怒っているのだ。

理由は簡単で、古都にもわかる。

敵が、攻めて来ない。

相手は元実業団が廃止に伴ってクラブになった伝統あるチーム、「カテナチオ」をウリにするだけあつて、確かに守りは抜群に巧かった。最近には珍しい3バックに両ウイングバックもべつたり下がっていわば5バック、5バックはやり慣れてないとマークの受け渡しなどがやりにくく逆に守りにくい面もあるのだが、かなり巧い。

特に危険なFW可憐とMFナナには運動量豊富なマーカーをガツチリ張り付け、自由を奪う。

それはいい。

二人とも若年層では有名人であり、元実業団ならそういう情報もよく集めているだろう。相手の強みを潰すのは兵法の理に適う。

だが攻めて来ないとはどういうことか。

サッカーでは、守備は攻撃のためにやるものだ。守備でボールを奪って、それを運んでゴールを狙う。ところが眼前の彼女らは、まるでそれが目的かのようにボールを奪いに走り、奪ってしまえばまるで満ち足りたかのようにスロー・ダウンする。

『……なんだこのチーム……』

上町大地は元々、守備的なチームがあまり好きではない。が、それでもそれが、たとえば鋭い殺人カウントーに繋がっていたり、全員守備から一斉に全員攻撃に移るような雄々しい戦いに結びついていいるなら、まだよかった。

しかしここはまるで、本来の目的、そうゴールを奪う喜びを、シュートを撃ちそれに繋がるパスを送る楽しさを、忘れていいるかのようだ。おそらく「我がチームは堅守が伝統」などと言ってるうちに、手段が目的

化してしまったのだろう。

守備に走る彼女達は確かに真剣で必死だ。だがそこには、チャレンジも無ければリスクも取らない。だからハラハラもドキドキも無く、ゆえに楽しさも面白さもまるで無い。

『……というか、彼女達自身が攻めたくならないのか
……』

大地が最も不可思議に思ったのは、彼女達自身がそ

れを受け入れていることだ。ウチの連中なんてDFだ
って守るのソコソコに前へ前へ行きたがる。攻撃のセ
ットプレーでは長身を理由にCB（センターバック）
二人がいつもゴール前へ走る。

それが、サッカー選手つてもものだろう。

『……わからん』

大地は考えるのを止めた。とにかく僕は、僕達は、
こんなチームに倒された、他の元気な、挑戦的な、積
極的な、楽しい、そして美しいチーム達の、仇を取る

までだ。

『……なにがなんでも、勝つ!!』

強すぎる意思が、キツイ眼光となつてピッチに注がれる。

古都はあまりコーチ見てると怖くなつてきたので、ベンチに目をやった。隣から、マキさん、ユミ姉さん、はなこさん、愛さん、ちーちゃん。

みんな真剣に観てるが、コーチほど怖い顔ではない。

聞いてみた。

「……どうでしょう、はなこさん」

「……んーまり強くはないわね、このままやつてりや、勝てるんじゃない？ 姉さん」

「ええ。時間の問題だと思うけど」

あら。意外に選手たちは、落ち着いていた。

「……ただ、どう切り崩すか物理的に手がちよつと……」

「ですね。ナナ押さえられて前スペース無いから流乃も走れない。クロス上がらないから胡桃が死んでて、あれだけ密集してるとさすがのありすも動き取れない、せいぜいキャプテン、エレ、蘭の撃ちっぱなしミドルぐらいしか」

「そこ、巧いのよ。こう、前後の選手がうまく重ならないように配置されてて、シュートコースかなり切ってる」

「くっだんねー練習してねーでもっと攻める練習しろっつーんですよね！」

どちらかというと普段フリーダムな守備で大変な目をみてるはずの千里までがそんな言葉を吐いた。

……ナナがボールを持った。敵DFから逃れてズルズル陣地を下げる、が、そこはさすがナナ、自軍ゴールに向け逆走しながら、左足を二七〇度振り抜いて胡桃めがけてムリヤリ・クロス。

胡桃、飛ぶ。しかし相手最長身選手がこれだけは、という気迫で身体をのしかからせ、自由を奪う。胡桃もなんとか頭で触れるが、ボールは明後日へ飛んでいた。

あー、と何度目かわからないため息がベンチを覆う。

「……0―0が相手のペースであることは間違いないので、どこかで断ち切りたいわね。ま、コーチが魔法の杖をふるってくれるでしょう」

「ようし、久しぶりにオレツチがFWを！」

「ふおわーどー」

千里の叫びを本職・愛が非難した。

「ふふつ、前線増やせばいいってもんじやないわよ。
むしろ私がエレあたりと替えてもらって、かき回

す！」

「4バックも要らないかも。もーさんと私と替えてもらって、蘭を前に突っ込ませる」

「あ、ハナさんがスイーパーやるならあつしがGKやりまっす！ 前へガツガツ行ってください！」

「忍様ヒマそうだし、意外に悪い案じゃないわね……」

「でしょ？ でがしょ？」

「……」

かしましく好きなこと井戸端論議ってる中で、古都

はおや？と思う。いつもなら「アタシアタシー！」な
マキが、黙ったまま顔をしかめて真剣に見入っている。
お腹でも痛いのかな？

……マキは、まだ悩んでいた。

自分があるそこにいたとして、なにができるか。

ナナはマークを振り払おうと、あらゆる手いや脚を
使っている。技術では到底及ばないアタシなら、もつ
と完璧に抑えられているだろう。

カレンはちよこまかとポジションを変え、ボールに

触っては局面打破を試みる。人使いのへ々な自分では、
ああいう真似はできまい。

なにができる、という自信が無い以上、「出せ」と
は到底言えなかった。

湧き出るキモチだけを根拠に喚き散らしていた今ま
での自分が、少し恥ずかしくなった。もちろんその蛮
勇も、時に必要なものだと思うが。

——前半終了、0—0。
おそらく相手の、Thinking Pot。

前半が終わった。

亮太は「勇気を出して」通路横の席に走った。
あの人、引き上げる。

「……マキさん!!」

物思いに耽っていたような硬い顔が、ぱあつ、と明るくなった。

「よく来たネ!!」

見上げれば、あの連中が、鈴生りになっている。照れて、笑った。

「アハハッ、ちよーつと手こずってるさー! ゴメンネおもしろくなくてー!」

「いえっ」「これからですよ!」「きたとこー」

「マキさん……」

なんて言葉を掛けたらいいんだろう。

考えるまでもない。いつも、チームメイトには、こう言ってた。

「……がんばって!!」

「オウサ!!」

ニツコリ笑って、拳をくれた。

空中でグータッチを、当てる。

さらに笑顔をくしゃくしゃにして、ロッカーへの通路を走っていった。

『……おねえちゃん……』

そう呼べばよかったかな、と少年は思った。
いや正確に言うとか、そう呼びたかった。

――

――ロッカールーム、着替え終わり、コーチを呼んだ。

入ってくるコーチを見て、古都は驚いた。
ニコニコ、してる。

「……みんなもわかっていると思うけど」
見回しながら、声も優しい。

「強い敵じゃないね。」

注意は三点、あります」

「「はいっ」「」

「ひとつめ。焦らないこと。まだ半分ある。向こうの
ペースにのせられないように」

「「はいっ！」」

気合十分で身体を震わせたり拳を握ったりしつつピツ
チへ向かう。

『……まあお上手になったこと。』

と、感心するマネージャー。きつと、腹の中では不
必要にデイフェンシブな相手にものすつごく煮えくり
返っているのだろうが、そういう個人的感情をぐつと
仕舞いこんで、今なす事を具体的に伝えていた。

ちよつと前までは溢れる自分の感情を伝染させるの
が得意だったのに……つて、これ試合によつて使い分

けてるのかしら？

確かに、イライラさせる相手には、こつちがイライラしては絶対にいけない。カスタマーサポートでも鉄則である。

そして古都、自分の気持ちもずいぶん軽くなつてること、気がついた。

そうか。

みんないつも、不安なんだ。

だから「大丈夫」の聲が聞きたいのだろう。そう言

ってもらえると、勇気が戻ってくるのだろう。

リーダーというのはそれだけのこともかもしれないし、
だがその言葉に説得力をもたせるには、並大抵のこと
ではない気もする。

今だって、ここまで連れてきてくれた上町コーチの
言だからこそ、超あつたりまえの注意が、重く響く。

「コーチって、大変だよね……」

「わ、マキさん」

「ダイチ、あんなにプリプリしてたのにカチツと切り
替えて……スゴイよ」

「そ、そうですね。ビックリしました」

「……でも、オモシロそう」

「ふふつ。そうですね！」

マキさんがそんなこと言うとは意外だった、が、ひよつとすると農園主というリーダーである曾祖父の血が、流れてるのかもしれない。

古都は定位置、大地の横に、マキは他のサブメンバーと共に軽いアップに向かう。

19番

——後半もまったく同じ。監督に「よくやってる」と褒められでもしたのだろうか、同じ戸締り用心火の用心作戦を繰り返してきた。

こちらはなんとかそれをこじ開けようとボールのようなものを差し込んだり、鍵穴に針金を突っ込んだり、ドアに体当たりしてみたり。しかし、耐えるというより反応がない。まるでベルリンの壁に卵を投げつけて

いるようである。

一三分経過。残り三〇分ちよい、手を打つならそろそろ……と古都が思い始めたその時、表情はすでに平静に戻っていたコーチ、が、くるつ、と振り返った。

「……マキ、やるぞ」

「ハイッ！」

「交代はどなたですか!？」

「明日葉。右サイドバック」

「「ええっ!？」」

全員から声が上がった。古都も。

そんなの、一度もやったこと……

かまわず立ち上がったマキの両肩に両手を置いて、顔を近づける。

「いいかよく聞け。

任務は『囧』だ」

「ハイ」

「ナナと頻繁に前後のポジションを変えて、右の前めで暴れて敵の注意を引きつけろ。その隙にフリーにな

ったナナに仕事をさせる。

ゴールの可能性はどうでもいい、できるだけ派手にドリつてクロス上げてシュート撃て。いいな」

「リョーカイツ!!」

「Dance! Maki!」

ポンポン、と頬を叩いて、お尻を、パーン!

マキ、走りながら叩かれた頬とお尻を自分でもパンパン叩いて気合いを入れる。

役割がハッキリしてる。やりやすい。

交代札が上がった。スタアナが、ドヤ声で期待を煽る。

『選手の交代をお知らせします。』

17番西九条明日葉に代わりましてマキ・パメラ・キシワダ、背番号……

10足す9（テン・プラス・ナイン）！！』

「キターーーーッ！！」

「試合動くぞ、マキやんコーーーーーール！！」

「「おう！！」」

リーダーの音頭に、サポが一斉に呼応する。「糸巻きの歌」と仕草とともに、

マーキーマキマキ マーキーマキマキ

踊って 撃って パメラ!!

マーキーマキマキ マーキーマキマキ

燃えろ 走れ パメラ!!

少年たちも見よう見まねでぐるぐる腕を巻いた。緊迫の場面なのに、どうにも楽しくなってくる。相手の何倍ものサポが居る理由が、わかってきた。

マキ、大声援に送られてピッチに駆け込む。

大地、ナナの名を叫んで手招くと、肩を組んで意を伝える。しきりに頷くナナ。送り出す。明日葉が急ぎ足で帰ってくる、ちよつと硬い顔の明日葉、を、両腕でぎゅつ、と抱き寄せる。

驚く明日葉、の耳元に唇を寄せて、

「……戦術上しょうがないんだ。ごめんね、明日葉」
「いつ、いいえ！　いいえ！」

ポワポワした顔でフラフラとベンチに戻ってくる明日葉ちゃん。はひひ、とため息と喘ぎ声の中間みたいな吐いて、椅子にうつ伏せとろりメルティング・チーズ。

「……もー、なにやってんだか」

「イヤラシイ……」

「はっば、気をしつかり持て、はっば！ 一等最初に落とされた事実は変わらないぞ！」

「ちよつと聞いてくださいよこないだね、『マキさんサイドバックですか』って聞いたら完全否定だった

たんですよ!？」

「できる男ってのはそういうものよ、人のアイデアをまるで自分の発案のように使いこなす」

「いろんな意味でひどいわ……」

——が、現実というものは、たいてい「ひどいやツ」が動かしていくものである。

守備重視、鉄板で右自陣に立ち塞がっていた明日葉と違って、マキはガツガツとナナを追い越すオーバーラップを掛ける。ナナも積極的にそれを使う。

「踊れ」と言われて燃えないブラジル娘は居ない。サポートを得、ゴールの重圧からも解放され、自由自在にボールを操る。右へ左へ前へ後ろへ、チームメイトも見たことないほど大胆にトリッキーに。小刻みにあるいは大きくステップ、激しく不規則な腰の回転、相手とボールが翻弄される様はまさにサンバ。

そして今日のマキは、積極性最高。

「「いっけーいっけー!!」」
ドギヤアアアアアアアアアン……

「うおおおおおおおおお……」

相手をかまし、サポがここぞ！と思つた瞬間、右脚を高く振り抜いてシュートを放つ。

これがまた最っ高にパワフルで、不規則にブレつつゴールを襲う。外れはしても清々しい。盛り上がる、ノッてくる。

シュート撃て撃てと指導者がクドクド言うはずである。

「ほいさ、マーさん！」

「ウイ!!」

かと思えば、軽やかなパス交換と共に、右サイドを攻め上がる。

自身もドリブル得意なナナとの相性は抜群。持ちすぎで囲まれればナナに返し、ナナも煮詰まればマキに預けた。

そういえば去年はこのコンビで、右サイドをズスタクにしたものだ。忘れられた作戦や技術だからって、劣っているとは限らない。他の使い勝手がいいから使わなくなっただけ、のこともある。

当然、相手の目も注意もぐいぐい引きつけられる、一気に重心が右へ、敵から言えば左へ、移っていった。その傾きを見逃さぬキャプテンではない。

「ナナッ！」

「おう！」

鋭く正確なパスが、ナナから飛ぶ。センターサークル付近。美緒、それを受けるや左サイド最奥めがけて思い切り蹴っ飛ばす。

きょうはどうにも暇だった流乃、余った脚を全部使って、コーナーフラッグ付近でそれを捉えて……だが一瞬、胡桃についてる長身マーカ―を思い出す。このまま素直に上げても、無理目。

切り返し、右に持ち替えて、

クロス！

それは可憐、相手G K、胡桃をはるかに越えて、右タッチ奥、に待ち構えていた、マキ。

ワーツ、と殺到する敵D F、そのたくさんの脚を薙ぎ払うかのようにまた、長い脚で何度も何度もフェイントを入れ、身体を張り、ボールを捏ねる。

右奥からゴールに、ゴールに、にじり寄る。

CBまでもがそれを潰さんと向かったその瞬間、

「ハアッ！」

呼気一発、大きく鋭いグラウンダーが、自陣向かって逆走していく。

あ、と敵味方が見送ったその先には、

ナナ、どフリー。

「……………うおりやつしや—————っ！！」

変な声挙げてワンタッチ、必殺の右脚が振り抜かれた。狙うは。

地面を走る相手すべてを無視していいと言われ、実際ナナからのクロスをここまで全て迎撃していた胡桃付対空D F、離陸する胡桃にへばりついて離れない。

が、目が追うボールに、違和感。

ちがう！

高空でグイ、と曲がったボールが、エース・ストライカーの足元めがけて降り注ぐ。

基本通り、一回消えて、DFの前に出てきた、可憐。

「……チェス!!」

ドン！ 1点。

格の違いを魅せつける、ダイレクト・ヴオレー。

歓声がスタジアムを包む。いつものジャンプガッツ・パフォーマンスの後、可憐はマキの元に走った。偶然か必然か、ナナもマキの元。なんといつても今のは、マキのガンバリが切り開いたチャンス。

マキを中心に三人で肩を組んで、笑いながら走る。

マキが客席を指さすと、ナナも可憐もそれにならつた。サポが拍手と歓声で応える。

「……さーくせん・どーんぴしやりー！」

「こういうことなのよね……ナナのスーパークロスと可憐のスーパーヴォレーのはずなのに」

「誰が見ても今のは、マキさんここで勝負あり、なんですよねえ」

「サッカーって、おもしろい」

感嘆しきりのベンチに、コーチが帰ってくる。先制

して一息かな、と思いきや、

「ユミ姉、いくぜ」

「あつ、はいっ！ どこ!？」

「右サイドバック。」

交代は胡桃。マキをトップに上げて2トップ」

「カウンター狙いね。了解、守り倒します」

と言ってガードグラスを掛けると、

「いや」

とグラスの鼻頭持つて下げられる。そしてウインク
一つ、

「たぶんむこう、出てこない。オーバーラップもバンバンやってくれ。このまま……叩き潰せ！」

「……ハイッ！」

グラスを元に戻して、ポン！と両肩を叩いた。そのままタッチラインまで送る。そして、

「マキーーーーッ！」

叫ぶ。振り返る。トップに入れ、と指を振ったあと、
「ハーーーーーーーーッ!!」

大声を出して、正拳突き。

なにごとだ、と目を丸くするチーム、
だけどマキには、それで伝わった。

「ダーーーーーッ!!」

同じように右拳を前に突き出すと、全力疾走で可憐に並ぶ敵陣深くに走った。

……戻ってきた胡桃と音立ててハイタッチ、胡桃、その指を離さない。

「……なに、いまの」

「ゴールしろ、って言ったの」

「それなら私でもできる」

「きょうはサンバの聖人の日なんだ。ブラジルっ娘使わきやもつたないだろ？」

「……」

……ベンチ。

「なんてなんて？　なんて言われたの？」

「……言いくるめられた」

「『本当は愛してる』とか？　『君のことは忘れな

い』とか？」

「『今日はブラジル祭り』、だつて」

「『はあ？』」

「お祭りですー！　今日は勝ちますようー！！」

「あ、明日葉復活」

「あれっ？ オフェンシブなサイドバックなら私でいいんじゃないの!？」

「攻めますよ、ミラクルズ!!」

あとは一方的、と言つてよかった。

1点を奪われた敵陣、奪ったボールを前に運ぼうとしですが、慣れないことはやるものではない。その瞬間、ミラクルズが殺到して奪い返される。前へ押し上げる力が弱いもので、自陣に張り付けられる、だからすぐシュートまで持つていかれる。

その様、ほとんど『スペース・インベーダー』のナゴヤ撃ち、ギリッギリでゴール・インだけ防いでるだけで、もはやどちらが勝者かは、誰の目にも明らかだった。

流れ、というのが戦いにはあつて、それをうまく掴んだ方が、乗った方が、離さない方が、勝つ。

ミラクルズは、流れを掴むのはヘタクソだったが、いったん掴んだ流れに乗る、それも悪ノリするのは得意中の十八番だった。

コツのひとつは、一番ノってる人間を使うこと。

ユミがお馴染み獵犬タツクルでボールを奪う右サイド、ハーフウェー付近、ナナに即預け、パス・アンド・ゴーのお手本を見せて右タツチを駆け上がる。

ナナ、一瞬背を伸ばしてルックアップ、敵をすこし、引きつけてその隙を縫って、駆け上がるユミ姉さんに、パス。

姉さん、そのパスを受けるやドリブルの角度を変え、ペナルティエリアめがけまっしぐら。

意表を突かれた敵選手が右往左往、壁を作って侵入を防ごうとする、その手前でトン、と立ち止まって、

ポイ、とばかりにバックパス、そこに、マキ。

フリーで受けた。周りを見た。シュートコースはさすがに無い、右、ユミに返すのは難しい、左、可憐、マーカールは一人。

思わず、声と、パスが出た。

「ワン・ツーッ!!」

鋭いパスが可憐の右脚にピタリ、可憐、思わずニヤ

り。

敵、迷う。

天下の此花可憐である、先制点の圧倒的な決定力を見てる、あの声は指示なんかじゃなく、ただの掛け声だろう。

その近くにいたすべての選手が可憐の進路を防ぎ、そのボールを奪おうとした。ゴールキーパーは、可憐に近いニアをしつかり締めた。それを見計らって、可憐、

リターン。

練習でもこんなに綺麗に決まらない、というワンツ
ーパスが通って、マキ、フリー、ゴール真正面。

そこまでパワー・シュートを見せつけられてたゴールキーパーが、反射で跳んだ。

きょうのマキは、よく周りが見えている。

いま求められていることは、ゴール。

ゴールは、誰もいない場所にシュートを撃つと、入りやすい。

ごくあたりまえのことだが、こんなことすら、興奮しすぎて頭沸騰してるいつもだと、忘れてる。

跳んだのを、見さだめて、ゆつたり、右脚を、かるーく、振った。

チップ・キック。

ぽーーーーん……

ゆるーくやわらかーく、ボールが可愛い弧を描いて、キーパーの身体の上を越えて、ゴールに吸い込まれた。

『クツキアイオーーーーーーーーーーーッ!!』

イタリア語で「スプーン」、もちろんローマの王子様、フランチェスコ・トッティと麻生亮太の得意技である。

「マジすか!? マジなんですかマキセンセイー」
「ッ！」

「あーんな技持つてるなんて！ いままで隠していたなんて！」

「お、お、お洒落すぎますー！ 私も、わたーしーもー」
「ー」

無言で固まるFW二人、愛、胡桃。

あんな人を小馬鹿にしたシュート……一生撃てそうにない。物理的に撃てたとしても、選択肢に入れない。世界は広い。

それを教えてくれるのが、サッカーの美点のひとつだろう。

今度はマキの周りに、ユミもありすも、それから美緒もエレーナも流乃もももも蘭も駆け寄った。長駆忍も、ゴール前から走ってきた。

まるで優勝でも決めたかのように、いつのまにか誰

かに高く高く抱きかかえ上げられたマキ、それでもやつぱり、客席の一点を探して、見つけて、指を差した。くしやくしやの笑顔とともに。

差された一団の男の子たちは、同じように指を拳を、突き出していた。同じように笑って、叫んで、ひとり、泣いて。

また何人かの、熱烈なミラクル・サポーターが、増えた。

——タイムアップ、整列礼握手、サポと観客向かって両手を振ってみんなで手をつないで深々とお礼して、駆け戻るベンチ。

一番最初に一番高速、もちろん本日の主役、マキ・パメラ・キシワダ。

「……ダイチ!!」

「ナイスファイト、マキ!!」

両腕を広げると、迷うこと無く飛び込んだ。ジャンプ一番、頭の上からのしかかって、腕と脚と頭とつまり全身でフェイス・ハガー。

[illegible]

•
•
•

「ふもーっ……」

「シーシーシーシーシーシーシー……」

大地支え切れず、押し倒される。馬乗り状態、笑み満載。

「アハハハハハハハハハハッ！」

今日やりやすかった！ 指示わかりやすかった

ヨ！」

「い、いや、マキのキレがよかった！ 僕何もしてない！」

「マキさん、マキさん、往来でござる。往来でござる」

もちろん興奮の極みにあるラテン娘の耳に入ってようはずもない。

「これからバンバン命令してネ！

アタシ、ダイチのためなら、なんだってするか
ら！」

「わかったわかった、わかったから降りて」

「マツキー、離れるのじゃー」

「パーメーラー！ やーめーらー！」

ひつぺがそうとしたももと忍の腕を振りほどいて、

「シューシューシュー……」

ダイチ、大好きシューシューシューツ!!」

迫る。

迫り来る超高速リップ・シュートから、大地の貞操の危機を守ったのは、

「チェーーーーーンス！」

古都の作戦ボード、A4サイズ。

「「ナイス・こつとん!!」」

「……アガガガ……」

もお、コットン、邪魔しないでヨーツ！」

「します！」

「それより早く降りてください、また変態一座の悪評が広く深く濃く……」

ありますが促す、居残りの観客がいつものバカをゲラゲラ笑って見ている。おたのしみ、試合終わりのミラクル劇場。

「……チエー、せつかくドサクサに紛れてダイチにチユーしちやおーと思つたのに・サー！」

「コーチのファースト・キスは、このマネージャーめが全力でお守りいたしマッスルニッポン！」

「あはは……や、ファーストじゃないんだけどね」

「「急!!」」

立ち上がったコーチ、パンパンとズボンの埃を払いつつ。

「あつ、大地君、その話は、その話はだめ」

キャプテンが真つ赤な顔で袖を引く。

……と、と言うことはまさか……

「……中学生の頃さ、ギリツギリの試合を今のマキの
ループみたいな僕の結構いいゴールで勝っちゃったこ
とがあつて、観に来てたかあさんがもう感極まっちゃ
つて」

「大地君、大地君」

もう、みなまで、言わないでください。

「……試合終わったらぶつ・ちゅーって、ホントみんなの前だったから恥ーずかしくて恥ずかしくて死にそうだったよ……って、あれ？ みんなどうしたの？」

ブロンズ像のように固まる者、垂れるヨダレを拭かぬ者、ガツクリと失意体前屈の者。

白い風の塊が、ピッチサイドを吹き抜けた。

この人これさえ無ければ……これさえ、無ければ……

……

「でもこの人はこれがあるから！　女の子に興味が無
いんです！　ね？　ステキでしょう？　でしょう？」

キャプテン……

貴女は本当に、えらい。

■ ラ・ニーヤ

——数日後の、お昼休み。

さていつもどおりランチ広げますかね、と2年の面々が集い机を並べ変えたあたりで、

「……………ミンナ〜！」

おやキシワダ先輩。珍しい。いつも変わらぬラテン

の笑顔が輝くその手に、薄い板。あれは……

「どうされました？」

「およ、そいつあ最新鋭のタブレットじゃねーすか」

「ウン！ これね、ミンナに特にダイチに観てもらおうと思つて、持ってきた！」

まだちよつときこちない手つきで、そのガジェット
の操作をする。デジモノ大好きの一三六が食いついて、

「羨ましいわー、これメツチャ高いねんでー、高級品

やねんでー、もう液晶の質とかタッチパネルの精度とか全然違つてて……つて、マキちゃんこんな興味あんまなかったですやんね？」

「フフツ、そーだったんだけど、ちよつとやりたいことできてー。これからこーゆーのも覚えていかなきゃいけないかなーつて」

「ええことですな！ 有望な最新技術には早よから嚙んどいた方が、結局はトクでつせー！」

「へへへ……あ、これ……だったっけ？」

「えと、何しますん？」

「写真のアルバム見るの」

「ああ、それやったらこれやなくて、こっちです」

ポポン、とアイコンをタップしピンチする。人物写真が、次々に。

「エッ!? なにこの超美男子! これ誰、これ誰!」

「あこれウチの弟ー。リョータローっていうの」

「わ、まるで天使と悪魔」

「ルノー? アタシが天使ダヨネエ?」

「ホントだ、あははっ、どっちも素敵だよー」

「これがパパとママ? ふふっ、なるほど、この二人

からマキちゃんが出てきそう」

「わーっ、これスゴイよ、何人居るの、これみんな家族!？」

「アハハ、さすがにジューギョーインの人が半分ぐらい」

一〇〇人乗っても大丈夫、的な集合写真の真ん中に、マキとリョータローを両脇に従える小さいがしこんな写真からでもオーラ溢れる老夫が居る。

「……こちらが例のオオジーチャンさん、ですね」

「ソソソ」

美緒の問いにうなずいて、

「タクミが撮ってくれた写真送ったらウチで大騒ぎになったちゃってさー。で、ビデオメール送ってきてくれたの！」

「なんと！」

「それがさー、ダイチ宛なの。で、観てもらおう、つて」

嫌な予感がした。

まあこういう時は、お約束ですよね。

ポン。再生。

『……ウエルカム、大地君!!

このたびはうちのふつつかなひ孫を嫁に貰うてくれるそうで、まったくもつてありがたい!!』

ほらー……

『我が、岸和田農園は、小さな農園ではある。しか

も！ 近年ブラジルの紅茶産業は縮小の一途、高級ブランド志向を強める各産地に押されっぱなしじゃ！』

「いや、あのですね」

「大ちゃん、これビデオメール」

『しかし！ 我ら岸和田一族が宮々と磨きあげてきた茶の木と茶葉は今もって一級品と自負しておる。この品質に……君の溢れんばかりの指導力、そして勝負の勘所を見極める決断力が加われば!! あるいはまた……』

「匠なに送ったの」

「乗っかってるヤツ」

「よりによつてなぜそれを」

「一番『生きてる』写真だったから……あ、いちおう撮りっぱだけど試合のビデオも」

「火に油やんけ……」

「あれ見りや誰だつて婿に欲しくなるわよね」

『……このように必勝は疑い得ない！　いつでもよろしい、君がこの試される大地に降り立ち、君のその逞しき名の通り根を下ろしてくれる日を、心待ちにしておるぞーッ!!』

「あの、それが実は」

「大地、大地、ビデオ、ビデオ」

『……麻紀や。』

涼太郎が家を継ぐと聞いて、もう思い残すことは無いと思うておったが、いざこうなつては……お前の結婚式までは、くたばれんツ!!』

「アハハッ」

『いや、むしろひいひい孫の誕生までは……』

いや、そこまでいけばそのひいひい孫がまた大地君のような立派な若者を婿にあるいは嫁に取るまで……

ワシは、ワシは……

一生、死ねんツ!!』

「ウン、オオジーチャン、長生き、してネ」

マキの微笑みに、ビデオの中の曾祖父が、笑顔で応える。笑うとクシャツとなるところが、ソックリ。

『では大地君、これからもヨロシク。

ドゥーーーーー・ミラクルズ!!

「だ は は は は は は は は は は は ……」

意表を突かれて、みんなで笑った。

人生という奇跡を長くやってきた人に、そう言われ
ると、なんだか力が湧いてくる。

「アハハ……あとパパとママとリョーからも挨拶があるんだけど、見る？」

「見ましょ見ましょ！」

「いや、ちよつと待って、これどうやって收拾つけるの!？」

大地が半マジで聞くと、マキ、チツ、チツ、チツ、と指を振って、

「ほおっておけばいいの。」

だつてそしたらオオジーチャン、ずーつと死ねないでしょ？」

「「なーるほど」」

「いやそんな簡単なものですかー!?」

「もうちよつとえーやんそんなこと、イケメン見せてイケメン」

「お前俺というものがありながらそんな」

「私宇治のお茶農家みたいな想像してた。これ大農園じゃないのひよつとして!?!」

「うわあ、このダンス・パーティー楽しそう〜!」

「本場、本場」

小さな板を奪い合うように、みんなで覗きこんで、

騒ぐ。こんな小さな板で世界が繋がるなんて、亮太郎さんが横浜で船に乗った時には想像できたのだろうか。

世界は、言葉を交わすには狭くなった。

でも、直接会うには、まだまだ広い。

アタシもきつともうすぐ一度は、ウチに帰る。

この暖かい家に。

けどきつとまた、出ていくのだろう。

行き先はわからない。

また日本かもしれないし、スペインとか、アメリカ

とか、全然別のどこかとか。

でもきつと家族はいつでも、いつまでも、ここに居て、アタシのことを待っていて、くれるのだろう。

「マキちゃん、これはこれは？　これはなに？」

「ねえマキ、これひよつとしてカルナヴァウ？」

「あ、このちっちゃい時の写真めちやめちや可愛いですね、先輩」

「はな、それじゃ今可愛くないって言ってるみたいだよ。よし！　今度また本気で撮りましょう！　スタジオ借りて！　ご家族、驚かせてみせます！」

「ほなウチも」

「お前関係ない」

そしてこの友人達も、それぞれの場所で、たまにア
タシのことを思い出したりも、してくれるのかもしれ
ない。

それでいいんじゃないかな、と思った。

リョータに伝えたかったのは、そういうこと。

無くしたものを数えると、足りないものを考えると、

キリがない。

今あるものを大切にして、新しいなにかを掴むために、その手を伸ばす。

それが続けているうちに、人生という旅は、いつか終わりを迎えるのだろう。

それだけの、ことじゃないかなあ。

「……マキさん、やりたいこと、って？」

大地がふと、尋ねた。

「フフツ、それはSecret」

「おやつ……はは、でもマキさんなら、なんでもできそうだなあ。バイタリテイあるから」

「アハハツ、アリガト。」

ダイチも、だよ」

「そうですかねえ……」

「なにもなければ、農園、継ぐ？」

「いやいやいや」

「フフフツ」

「ちよーーーっとおおおおおお！

私達のことはもういいの!?　もう忘れてしまったの

マツキー!! どうせ……どうせ私のことなんて、ケー
キの横に巻いてあるセロファンぐらいにしか思っ
てないでしょ!」

「あ、それがビデオレター? 見せて見せて」

ももが忍が、胡桃がユミが、3年生がやってきた。
この分だと早く1年生にも見せないと、またあのお子
ら拗ねちゃう。

ひとだかりの中心で、マキは笑う。

サッカーのコーチになりたい。

なーんてことを言ったらきつと、みんなに笑われる。
でも、ちよつとだけ、ホンキ。

リョータたちと遊んだ時間、ダイチの指示で自分が
思ってるより輝く自分、これを、もつと……

そしていつの日にか。

ダイチのアシスタントとして一緒に日本代表を、
いや、

ブラジル代表を率いて、日本代表を率いるダイチと
対戦する。なんてことができたら……

最高だ。

そんな夢を見るだけで、すつごく楽しかった。
だからこのごろ、ずつと笑ってる。

夜中でも、
独りでも。

「……えっ、ちよつと待って、これ初の海外サポータ
ーなんじゃないの!？」

「いやあ俺達もワールド・ワイドになりました！」
「なんたつてブラジルのおじいちゃんが叫ぶぐらいだ

もんね！」

「……せーの」

「「ドゥー……ミラクルズ!!」

「「あははははははははははははははは……」

奇跡はいま、起きている。

旅を続ける旅人達が、いまこの瞬間、ここに集っている、という奇跡が。

よつてらつしやいみてらつしやい、
サンバのショーが始まるよ、
本場から来た本物さ。

刻むステップ弾けるリズム、
爆ぜる手脚は炎もかくや、
よければ一緒に踊ろうぜ？

背番号なら19番、もちろん10に9を足す。
ファンタジスタでストライカー、
女王様の番号サ。

褐色の、ケモノがゴールに突き進む。

獲物射る、瞳は宝石エメラルド。

あああれぞ、きつと「ラ・ニーニャ」 （神の娘）

マキ・パメラ・キシワダ、そう、

太陽の、一人娘。

Never Give Up, Go Ahead, and DO MIRACLES!

「太陽のラ・ニーニャ」

ミラクルズ・フォーメーション変遷図
(クイーンズカップ・地方予選)

1 Start 4-4-2 "Double Diamond"



Reserve
GK20千里 DF2はなこ MF16由美子 MF19マキ FW11愛

2 58min 3-5-2 "Passista"



Reserve
GK20千里 DF2はなこ MF16由美子 FW11愛
OUT
DF17明日葉

3 83min 4-4-2 "La Nina"



Reserve
GK20千里 DF2はなこ FW11愛
OUT
DF17明日葉 FW14胡桃

■ あとがき

ありがとうございます。

ながたかずひさです。お楽しみいただけたでしょうか。

今回はマキちゃんのおはなしでした。

どうしても「望郷」という気持ちを描きたかったんです。

僕が故郷を離れたのは二回通算半年ばかりですが、
それでも小学生時代の、友との（おそらく）永遠の別れはなかなか辛かったです。
大人になってからのほうが、連絡の手段と可能性があるゆえに、
遠くアメリカなんが行っても「じゃ」「おう」みたいな感じなんですよ。

大阪が僕の故郷になります。大阪人は自虐ネタが好きで、

幸福度調査みたいなのも常に下位に甘んじますが、

そんなにひどい土地じゃないですよ。

メシは美味しいネーチャンは……おもしろい（笑）

ネーチャン→オカン→オバハンと進化してどんどん強くなります。

土地、風物、歴史も大事ですがいちばん故郷の記憶に結びつくのは……

人じゃないでしょうか。

亮太君ぐらいの歳に「優しくしてくれたお姉さん」の記憶は

男の子にはクッキリ残るものでして、まあ亮太君は幸せ者……かな？

お読み頂きまして、まことにありがとうございました。

貴方様に健康と笑顔のあらんことを。

■ おくづけ

書名 Miracles! Episode 19 太陽のラ・ニーニャ

作者 ながたかずひさ

発行 サークル PowerNetwork!!

発行日 2011 年 12 月 31 日

Web <http://rakken.net/>

twitterID KazuhisaNagata

Mail nagata@mti.biglobe.ne.jp



**Miracles! Episode 19 (#12) - La Niña del sol -
Powered by Kazuhisa Nagata**